

第260図 石器(2)

る。約半分位が現存するであろう。2は扁平な柱状を呈し、4面が使用されているが、欠損部分の方が多いと思われる。3、4も扁平な柱状を呈し、半分以上が欠損するものと思われるが、やはり4面が使用されており、4は底面にも擦痕が認められる。5は完形品であり、使用のため変形したものと思われるが菱形状を呈しており、6面が使用されている。

(金子 直行)

IX とうのこし遺跡の調査

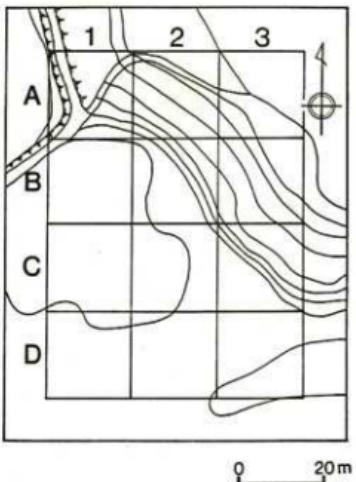
1. 遺跡の概観と調査経過

とうのこし遺跡は、大宮台地が南部に至り、樹枝状になった一舌状台地東縁に位置する。台地は南北に長い島状で、西側南北が大きくなっている。本遺跡は明花向遺跡の北西約0.7kmに位置し、井沼方遺跡とは支谷を0.5km隔てて対岸をなしている。標高約14m、沖積低地との比高6~7mを測る。表土(30~40cm)下の削平は激しく、ハードローム層あるいはそれ以下にまで達している。

本遺跡では削平以前の遺構についてはこれを確認できなかったが、近世削平時から以後の遺構としては、区画を思わせる溝、土壙、掘立柱建物跡、モヤシ栽培用のムロ穴等が検出された。また表土中からは多量の陶磁器類に混じって、少量かつ小片の縄文式土器片が出土している。

調査は昭和57年8月16日に開始したが、あまりの削平の激しさに加え、連日の猛暑のために口を閉ざす者が多い。8月の末に数基のムロ穴が検出されるが、作業員の方に戦前まで使用していたものだと教えられる。また、9月の初めには、溝の内側に数度にわたり建て換えたと思われる掘立柱建物跡を検出するが、これも古く明治・大正時代頃まで使われていた農作業小屋であることを指摘される。9月28日までに遺跡測量をすべて終える。先土器時代については、台地の削平及び擾乱が激しいため、これの確認調査は実施しなかった。9月30日までに整地及び機材撤収を行ない、とうのこし遺跡の調査を終了する。

(飼持 和夫)



第261図 とうのこし遺跡

2. 縄文時代の出土遺物 (第212図1~20)

本遺跡出土遺物は数量も少なく、殆どが細片である。ここでは文様の判別出来るものを図示し、一括して説明することにする。

1は表面に削る様な整形がみられる破片で、胎土緻密であり、赤褐色を呈する。第Ⅳ群土器である。2は表面に条痕のみられるもので、纖維が若干含まれる第Ⅵ群土器である。

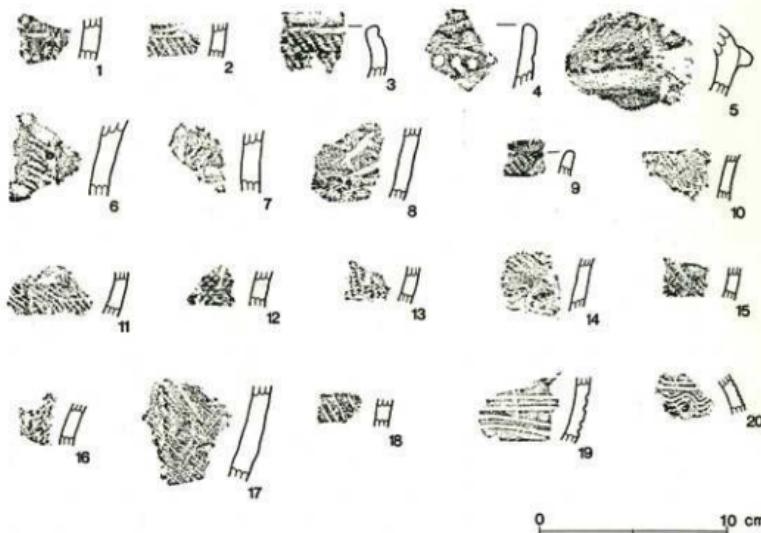
3~16は第Ⅶ群土器である。3はキャリバー形土器の口縁部であり、縄文RLが施文される。4は口縁部無文帯を持つ深鉢形土器の口縁部であり、円形の刺突列が口縁部に一条廻る。5は頭部と胸部で屈曲する深鉢形土器であり、屈曲部に縫合帶が貼付されている。6, 7は胴部破片で、磨消懸垂文を持つものである。6は縄文LRが施文されている。9~16は縄文のみ施文される土器である。12に複節RLRが施文されている以外、他は全て縄文RLが施文されている。以上、加曾利E式に比定されるものである。

17は時期不詳であり、細い沈線で斜格子状モチーフを描く。18も同様細い併行沈線が描出される。

19は第Ⅹ群土器で、加曾利B式に比定される。4本の併行沈線が施文されており、器面は良く研磨されている。

20は櫛歯状工具で、水平線と波状沈線と描くものであり、時期は不詳である。胎土は緻密であり、裏面は研磨されている。

(金子 直行)



第262図 グリッド出土遺物

第20表 縄文時代石器・土製品一覧表(1)

図版番号	器種	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
第45図	石 錄	L-6-14	2.2	1.5	0.4	1.2	チャート
	石 錄	L-6-24	2.1	1.5	0.3	0.8	チャート
	石 錄	L-7-18	2.1	1.5	0.4	0.8	チャート
	石 錄	L-6-2	2.5	(1.1)	0.5	1.2	黒曜石
	トランシエ様石器	N-5-5	5.8	2.9	1.0	22.0	硬質頁岩
第46図	尖頭器	M-7-1	(3.1)	2.9	0.9	11.6	安山岩
	打製石斧	N-5-5	(6.3)	6.5	1.3	65.8	硬質頁岩
	打製石斧	M-5-25	6.8	4.3	2.2	79.7	硬質頁岩
	打製石斧	M-6-6	(3.2)	5.0	1.1	21.9	安山岩
第100図	搔器	L-6-24	5.1	9.7	1.7	82.3	硬質頁岩
	土製耳飾	I-15-1	3.4	(2.0)	1.1	6.1	
	土製耳飾	I-15-3	2.9	(1.4)	0.9	4.4	
	土錘	G-12-14	3.5	3.6	0.7	11.1	
	土錘	H-15-7	3.9	4.2	0.8	17.4	
第101図	舟形土製品	SF-1	6.4	2.1	1.7	12.3	
	石 錄	G-14-21	2.3	1.3	0.3	0.7	チャート
	石 錄	G-12-25	2.1	1.6	0.4	0.7	チャート
	石 錄	I-13-3	2.3	1.7	0.5	1.4	チャート
	石 錄	SF-1	1.9	1.8	0.5	0.9	チャート
	石 錄	表採	2.7	2.1	0.7	3.4	チャート
	削器	G-13-12	3.1	1.4	0.5	2.1	硬質頁岩
	局部磨製石斧	I-13-5	3.5	1.7	0.7	4.7	細粒硬砂岩
	局部磨製石斧	H-14-1	4.7	2.8	1.0	19.2	硬質頁岩
	局部磨製石斧	I-13-5	6.2	2.8	1.5	42.6	硬質頁岩
	局部磨製石斧	G-12-20	5.3	3.6	1.1	30.8	硬質頁岩
	磨製錐状石器	G-13-19	5.4	2.0	1.5	23.8	硬質頁岩
	磨製石斧	表採	5.6	2.8	1.4	27.9	硬質頁岩
第102図	磨製石斧	I-13-12	(4.9)	3.3	1.4	31.4	硬質頁岩
	磨製石斧	SI-1	6.4	3.9	2.2	81.6	硬質頁岩
	磨製石斧	H-15-16	(5.3)	5.2	3.2	126.5	細粒硬砂岩
	碌器	G-13-16	8.6	6.4	3.2	227.9	閃綠岩
	打製石斧	H-13-23	7.1	3.6	1.9	65.6	硬質頁岩
	打製石斧	H-12-5	8.2	3.2	1.4	47.5	硬質頁岩
	打製石斧	H-13-4	8.3	3.8	1.7	69.3	硬質頁岩
	打製石斧	H-13-23	5.4	3.6	1.8	46.1	硬質頁岩
	打製石斧	I-14-16	(5.1)	5.3	2.0	59.9	硬質頁岩
	打製石斧	H-13-19	(6.6)	5.9	2.7	139.9	硬質頁岩
第103図	打製石斧	I-13-3	(7.4)	3.5	1.8	49.8	硬質頁岩
	打製石斧	I-15-4	(5.1)	3.7	1.2	19.6	硬質頁岩
	打製石斧	I-13-12	(5.0)	7.1	2.2	75.7	硬質頁岩
	搔器	G-12-15	5.6	3.3	1.9	42.9	硬質頁岩
	搔器	H-14-8	3.8	4.4	1.9	35.9	硬質頁岩
	搔器	G-13-16	3.5	6.3	2.1	46.3	硬質頁岩
	磨石	G-12-14	(6.1)	6.5	1.6	97.7	硬質頁岩
	石皿	I-15-5			2.2~1.0	151.1	綠泥片岩
	石皿	I-13-4			2.9~2.4	275.4	輝石安山岩質スコリア
	石皿	H-13-19			3.9~2.3	95.2	輝石安山岩質スコリア

第20表 編文時代石器・土製品一覧表(2)

図版番号	器種	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
第103図 10	磨石	H-13-22	(6.2)	7.1	3.5	252.5	閃綠岩
	磨石	I-14-22	(5.8)	7.5	4.6	285.4	閃綠岩
第104図 1	蔽石・窪石	I-15-10	10.0	7.9	4.0	499.9	閃綠岩
	蔽石・窪石	G-13-7	(8.8)	8.5	3.4	365.8	閃綠岩
	蔽石・窪石	SI-1	9.0	7.2	4.4	360.3	輝石安山岩
	蔽石・窪石	G-13-18	5.5	6.6	3.6	174.0	閃綠岩
	蔽石・窪石	H-15-22	(7.5)	8.7	3.5	240.2	閃綠岩
第105図 1	蔽石・窪石	H-15-23	9.0	6.4	3.9	313.7	閃綠岩
	蔽石・窪石	H-14-9	6.7	5.7	3.8	173.2	閃綠岩
	スタンブ形石器	I-15-5	5.5	4.4	2.5	101.7	硬質頁岩
	スタンブ形石器	H-15-2	6.6	4.8	3.6	164.4	閃綠岩
	スタンブ形石器	表採	(6.2)	7.1	3.3	174.7	硬質砂岩
第106図 1	スタンブ形石器	H-15-14	8.1	6.9	4.3	302.7	細粒硬砂岩
	スタンブ形石器	H-15-7	12.0	6.0	4.4	488.4	硬質砂岩
	スタンブ形石器	H-13	9.7	7.6	4.7	421.4	硬質砂岩
第218図 1	スタンブ形石器	J-16	16.1	16.1	11.3	1127.4	石英斑岩
	尖頭器	B-3-7	5.8	1.7	0.7	7.6	硬質頁岩
	石鏃	表採	2.5	1.6	0.2	1.0	チャート
	石鏃	B-4-22	1.7	1.4	0.3	0.5	黒曜石
	石鏃	表採	2.1	(1.8)	0.2	0.6	チャート
第219図 1	栗形土製品	C-3-6	3.0	3.6	1.8	11.3	
	スタンブ形石器	C-7-16	10.1	7.1	6.6	600.3	硬質砂岩
第241図 1	尖頭器	表採	(5.1)	(3.0)	(0.9)	12.0	硬質頁岩
	石鏃	SI-1	(1.9)	(1.9)	0.4	1.1	チャート
第242図 1	打製石斧	表採	(5.6)	4.6	1.9	73.1	硬質頁岩
	搔	表採	5.4	4.3	1.6	29.3	黒曜石
	打製石斧	表採	5.1	3.3	1.6	29.9	硬質頁岩
	礫	表採	1.1	8.4	3.3	358.7	細粒硬砂岩
第259図 1	尖頭器	D-2-1	(4.9)	2.5	1.0	15.3	硬質頁岩
	尖頭器	D-2-22	(4.2)	2.5	0.9	11.5	硬質頁岩
	石鏃	D-2-19	1.8	1.2	0.3	0.4	チャート
	石鏃	D-2-24	1.9	1.4	0.4	0.8	チャート
	石鏃	D-2-2	1.9	1.3	0.4	0.7	チャート
	石鏃	D-2-19	2.0	1.5	0.4	1.0	チャート
	石鏃	D-2-24	2.1	1.9	0.3	0.5	チャート
	石鏃	D-2-23	1.8	1.4	0.5	0.7	チャート
	石鏃	E-2-5	1.8	(1.5)	0.5	0.7	黒曜石
	石鏃	E-2-4	2.1	(1.4)	0.4	0.8	チャート
第260図 1	石鏃	E-2-13	1.3	(1.5)	0.4	0.8	チャート
	磨製石斧	D-3-1	(4.2)	2.9	1.2	16.4	硬質頁岩
	削製器	E-2-3	3.2	2.6	0.8	5.7	チャート
	打製石斧	C-2	3.2	2.0	1.0	5.6	チャート
	砥	D-2-1	(6.5)	3.8	2.6	83.1	安山岩
	砥	D-2-4	(5.4)	3.3	1.6	26.1	細粒硬砂岩
	砥	D-2-6	(4.9)	2.6	2.0	35.4	細粒硬砂岩
	砥	D-2-4	(4.7)	3.1	1.3	24.9	細粒硬砂岩
	砥	D-2-24	11.2	4.2	3.4	195.5	細粒硬砂岩

X 結 語

1. 先土器時代

先土器時代の資料は明花向遺跡A区・C区・井沼方馬堤遺跡の三箇所から出土した。各遺跡ごとにいくつかの特徴についてまとめてみよう。

明花向遺跡A区 第Ⅳ層と第Ⅷ～Ⅹ層にわたる二時期の石器群が検出された。第Ⅳ層では1グリッド内3点の石器以外にはプライマリーな状態では確認できなかった。表面探集資料も含めた2点のナイフ形石器はC区の出土資料に酷似する。C区と同時期の石器群は周辺に広く分布しているようである。土壌から検出された1点の彫器は、ナイフ形石器と同時期かどうかは不明である。

第Ⅷ～Ⅹ層の出土資料の中には製品が殆ど含まれていなかったが、剝片剥離作業に関わる良好な接合例を得ることができた。それは二つに分けることができる。ひとつは拳大の円錐をあまり打面調整を施すことなく剥離作業を行なうものである。安山岩母岩1・2がこれにあたる。良好な剝片が剝がされた痕跡は少なく、むしろ「ためし割り」のような様相が強い。もうひとつは大形厚手の剝片を剥いで、それを素材に剥離作業を行なうものである。チャート母岩1がそれである。前段階の剥離痕の稜を打点としたり、打面を山形に整えつつ横長の剝片を剥いでいる。同様の例は武藏野台地の第Ⅰ黒色帯下の出土例に認められる。県内では富士見市打越遺跡LA地点第Ⅹ層の出土資料が好例である。当遺跡の資料も正にそれに一致し、出土層位から考えても大宮台地最古の石器群である。

明花向遺跡C区 第Ⅳ層からはナイフ形石器を中心とした資料が得られた。ナイフ形石器は二つに分けられる。ひとつは剝片を縦長に用いている。長さは4cm、幅2cm前後のものが多く、長さと幅の比率は2対1となり概形が幅広の木葉形にちかい。先端角は50度前後、側刃角は140度前後に集中する。どちらか一側縁に加工が集中するが、残る一側縁には剝片の屈曲した末部や打面をあてておらず、さながら両側縁加工のように作り上げられている。もうひとつのナイフ形石器は先端角が60度、側刃角が100～110度前後となる。二つの角度の和は180度にちかいが前記したやや木葉形のナイフ形石器よりも両角度の差が少なく、結果的に台形状を呈する概形となる。長さ2～4cmは前後、幅は2cmを中心とする。長さと幅の比率は概ね3対2となるが長さのバラツキが著しいのに対して、幅は一定の大きさを保つような傾向がある。

これらのナイフ形石器は神奈川県大和市深見歟訪山遺跡第Ⅲ文化層の資料に類似する点がある(大和市教育委員会 1983)。しかし同遺跡では尖頭器が伴出したとされ、ナイフ形石器に区分されたものと分離しがたい形状を成している。県内では富士見市松ノ木遺跡がある(田中 1979b)。台形状のナイフ形石器を中心として、本遺跡と同様に尖頭器は伴出していない。しかしナイフ形石器の形状にはやや異なる点がある。本遺跡の年代的位置は深見歟訪山遺跡の第Ⅲと第Ⅳ文化層との層位的序列により、砂川型式期以後と考えられる。ナイフ形石器の裏面加工の中には砂川型式期に継続するものがあるかもしれない。しかし他遺跡の資料を考え合わせてもさらにいくつかの細別が

予想されるところである。

井沼方馬堤遺跡 第Ⅳ～Ⅶ層から出土した石器群は量的に少ない。しかし角錐状石器と台形状のナイフ形石器が明らかに同一母岩から製作されていることなどで、注目すべき点も少なくない。

以上の先土器時代資料出土遺跡を層位的時間差の中に置くと、古い順に明花向遺跡A区第Ⅷ～Ⅹ層、井沼方馬堤第Ⅳ～Ⅶ層、明花向遺跡C区・A区第Ⅳ層となろう。ひとつの遺跡がそれぞれほぼ一時期の石器群に限定されていることから、資料的にも価値の高いものと思われる。

大宮台地の先土器文化

大宮台地の先土器時代遺跡は200箇所にものぼり、すでにその集成がなされている（荒井・実川・小田 1970、荒井・実川・田中・織笠 1971）。その大半は表面採集による確認にとどまっていたが、最近では調査例も20箇所ちかくに増加してようやく各時期にわたる石器群が検出されはじめしてきた。埼玉県内における先土器時代調査の現状については以前に略述したことがあるが（田中 1979a）、ここではすでに調査報告書の刊行された資料を中心として大宮台地の先土器時代の石器群について述べてみたい。

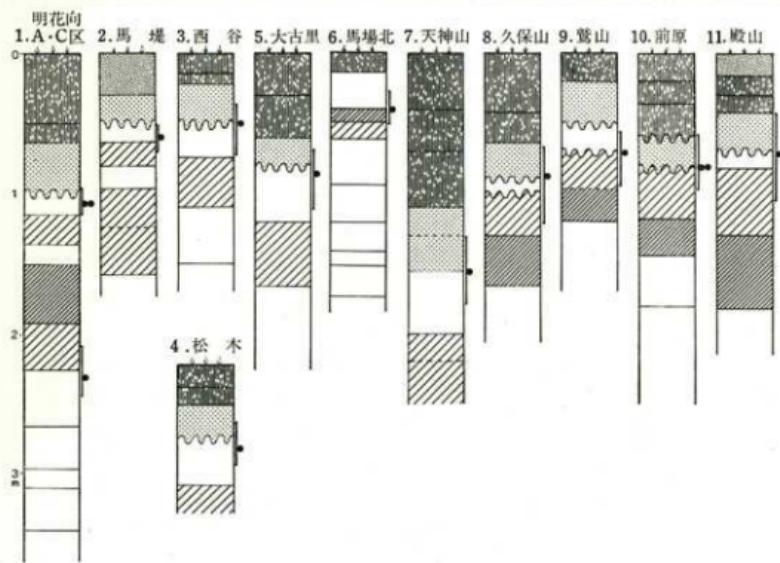
大宮台地の先土器時代調査例は南部に多く、北部では今のところ少ない（第263図）。特に南部の浦和市を中心として集中しているが、荒川に面した上尾市などの西部、下総台地に隣接する東部地域にも検出例が増加している。層序を対比してみると二枚の黒色帯が確認されているのは本報告書中に述べた明花向・井沼方馬堤両遺跡他数箇所に限られている。その明花向遺跡においては第Ⅰ黒色帯の上部で黒味が強く、下部では薄くなる現象が認められる。当遺跡での黒色帯の成因に局地的な事情があるのかもしれない。

大宮台地や下総台地の黒色帯は二枚の黒色帯が圧縮したものと言われているが、第Ⅰ黒色帯の検出にはいわゆるハードローム層の層厚の問題も関連するのではないかだろうか。当遺跡のようにハードローム層が厚い場合には確認される確率も高いが、大宮台地南部以外の地域では殆ど認められていない。代ってソフトロームが厚く堆積している現象が共通して認められる。これらの地域においてもソフトローム形成以前に第Ⅰ黒色帯が存在していた可能性も当然考えられよう。

黒色帯についてさらにつけ加えておきたい。当遺跡で第Ⅹ層とした暗褐色土層である。第Ⅸ黒色帯下に位置するが色調は第Ⅰ黒色帯に似て黒味があり、それに先後する層とは明らかに区別される。こうした特徴は大宮や下総台地、あるいは武藏野台地の遺跡においても数箇所で確認できた経験がある。これらの層に共通性はないのだろうか。色調を基準とするなら「黒色帯」と「暗色帯」とに区分するはどうであろうか。鍵層となる可能性も含めてさらに観察を続けてゆきたい。

明花向遺跡A区のようなより下層における石器群の検出例は他の大宮台地の遺跡には認められていない。石器群の検出例が最も多いのはハードロームとソフトローム層にかけてである。しかし出土層位と石器群の関係については問題点も多い。

大宮台地における主な調査資料を仮に大きく四つに区分しておく。ひとつは角錐状石器を含む石器群（西谷・松木・天神山）である。第二は角錐状石器を含まず素材を横長や縦長に用いたナイフ形石器を含むもの（馬場北・前原第2ブロック・殿山）、第三は素材を縦長に用いた細身のナイフ形石器を主体とするもの（久保山・前原第1ブロック）、そして第四にそれら以外のもの（大古里



第263図 大宮台地の先土器時代遺跡と層位

・鷲山)である。これら各種の石器群が大宮台地においてはハードロームを中心としてその先後に集中する。最も典型的なものは前原遺跡である。第二と第三の石器群が同一層位から出土している。これらの石器群を区分するとすれば層位ではなく型式的対比による以外にない。

第一の角錐状石器を含むものでは大形の例が西谷に、やや小形の例が天神山にある。松木の角錐状石器と呼ばれたもの(第264図6)は新座市池田遺跡の資料に類似するのかもしれない(新座市教育委員会 1976)。しかし実測図からはナイフ形石器のようにも見える。天神山遺跡のナイフ形石器(29)には明確な調整加工がない。これらをナイフ形石器とするのなら相応の評価が必要であろう。

第二の石器群では上尾市殿山遺跡が重要である。国府型ナイフがまとめて出土した(第265図56~60)。これらの大半を国府型ナイフと認めない意見もあるが(平口 1983)、それが当を得ているかも問題であるがいわゆる「典型例」にのみ眼を奪われて実態を見失ってはいないだろうか。典型を重視する見方に従えば平口氏の名付けた「三国技法」なるもの、「ただの横長側片の接合例」にすぎないとも言えよう。国府型ナイフ形石器はもう一例浦和市馬場北遺跡からも出土している(第264図24)。しかし表探資料にちかいために他の石器群との関連は不明である。

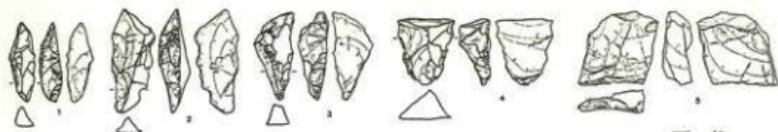
第三の久保山遺跡・前原遺跡第1ブロックの資料は砂川期のものと思われる。しかし異なる点もある。久保山遺跡のナイフ形石器第1形態は細身であるが(第265図32・33)、前原遺跡ではそれよりもやや幅広で(43)、基部側刃縁をえぐるような加工例もある(44)。久保山遺跡の石核は側片を素材としてさながら細石核の一様に剥離作業面を限って一方向から剥片を剥いでいる(36)。剥片剥離の上からも砂川期を細分し得る可能性があるかもしれない。

第四の石器群には大古里や鷲山の例がある。このうち資料数の乏しい鷲山例を除くと、大古里遺跡の石器群は明花向遺跡C区第IV層のナイフ形石器にちかいようにも見える。しかしナイフ形石器の形状には差がある。台形石器と呼ばれたものも(第264図17~19)明花向遺跡C区のあり方とは異っている。大古里遺跡は尖頭器主体の石器群(織笠・松井・高野 1976)とされているが、尖頭器頭部破片の単独出土例からどこまで石器群全体の性格を規定することができるだろうか。

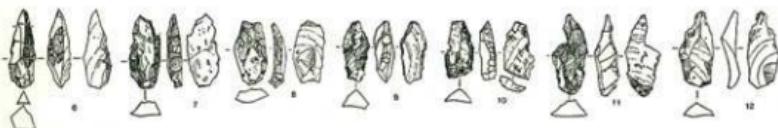
明花向遺跡A区・C区・井沼方馬堤遺跡の出土資料は他の大宮台地の諸遺跡と対比するとどうだろうか。明花向遺跡A区第V~IX層では比較資料がない。今後資料の増加が当然予想されるところである。明花向遺跡C区第IV層は大古里例にちかい点もある。しかし全体としては石器群のあり方が異なるようである。尖頭器の共伴についてはさらに検証を必要としよう。井沼方馬堤遺跡第V~VII層の石器群は西谷や天神山遺跡例に類似する。しかし井沼方馬堤遺跡も含めて角錐状石器以外の石器が乏しい。

大宮台地の先土器時代石器群は本報告書で述べた三遺跡を加えて資料的にはより充実したものとなったが、評価の点では確定できないものもある。徒に他地域の編年案の中に解消することなく、本地域における資料の検出と評価の蓄積をはかるべきであろう。

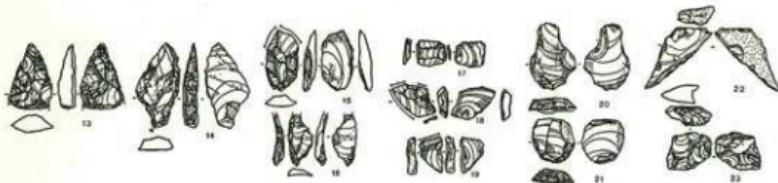
(田中 英司)



西谷



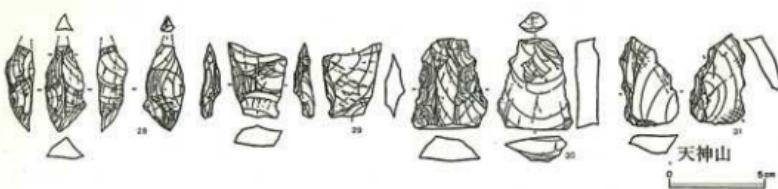
松木



大古里



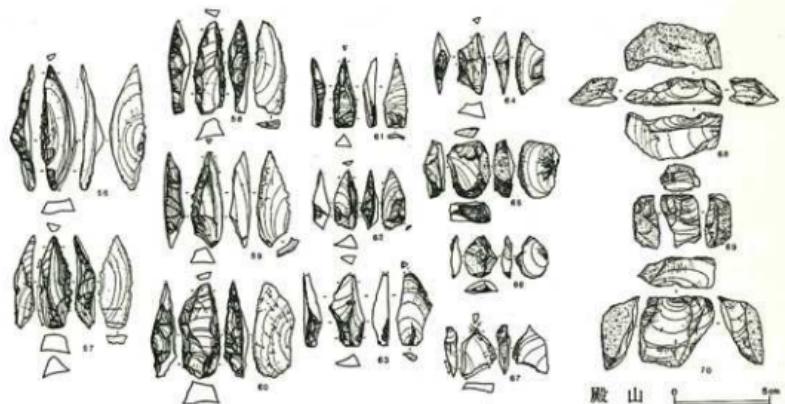
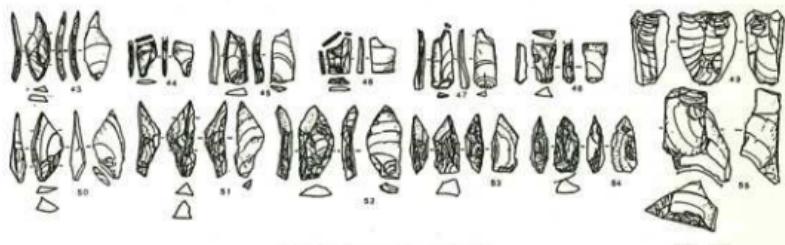
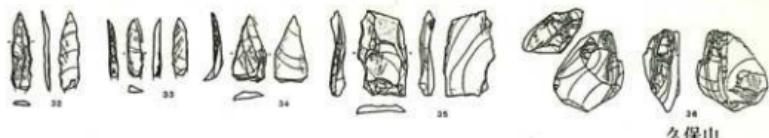
馬場北



天神山

0 5mm

第264図 大宮台地の先土器時代遺跡(1)



第265図 大宮台地の先土器時代遺跡(2)

引用・参考文献

- 青木義勝 1983 「(1)旧石器時代のユニット出土遺物」『松木北遺跡・松木遺跡発掘調査報告書』
- 荒井幹夫・実川順一・小田静夫 1970 「大宮台地の先土器時代新資料について」『Prehistory』23
- 荒井幹夫・実川順一・中田英司・織笠昭 1971 「大宮台地の先土器時代新資料(続)」『Prehistory』25
- 梅原秀人 1983 a 「西谷遺跡」『西谷・和田南・大北・大間木内谷遺跡発掘調査報告書』
- 1983 b 「馬場北遺跡」『北宿・馬場東・馬場・馬場・小室山遺跡発掘調査報告書』
- 織笠 昭・松井正信・高野博光 1976 「1. 先土器時代の遺物とその分布」『大古里遺跡発掘調査報告書』
- 斎藤悟朗・柿沼幹夫・津田進・松井正信 1978 『天神山遺跡』
- 石器研究会編 1982 『殿山遺跡』
- 田代 治 1983 「第1節先土器時代」『鶯山遺跡』
- 田中英司 1978 「第1章山室遺跡第2地点」『富士見市中央遺跡群I』
- 1979 a 「埼玉県における先土器時代調査の現状と課題」『情報』6
- 1979 b 「第3章先土器時代の遺構と遺物」『松ノ木遺跡第1地点』
- 1979 c 「武藏野台地II b期前半の石器群と砂川期の設定について」『神奈川考古』第7号
- 新座市教育委員会 1976 『池田遺跡発掘調査報告書』
- 西井幸雄 1983 「第III章先土器時代」『前原遺跡』
- 平口哲夫 1983 「関東の湘戸内系石器群について」『神奈川考古』第7号
- 富士見市教育委員会 1978 『打越遺跡』
- 山下秀樹 1983 「IV先土器時代」『久保山』
- 大和市教育委員会 1983 『深見跡訪山遺跡』

2. 縄文時代

(1) 出土遺物からみた遺跡の概観

本報告書は明花向遺跡A区・B区・C区、明花上ノ台遺跡、井沼方馬堤遺跡、とうのこし遺跡の計6地点が集録されている。各遺跡又は地区ごとによって出土遺物に時期的なまとまりが看取され、ここではそれ等を遺跡ごとに簡単に整理してみたい。

明花向遺跡A区

出土土器は殆ど全てといつて良い程、第V群土器であり、他の時期の土器は数片を数える程度である。それ等は条痕文系土器群前半期にあって、野島式に比定されるが、野島式の中でも新しい段階には位置付けられよう。

検出された遺構は堅穴状遺構、炉穴、土壙であるが、これ等の遺構から出土した土器は、細縫起縦文のみ施文されるものも含まれるが、太沈線区画内に沈線又は刺突文を充填するものが主体を占めている。堅穴状遺構が2軒検出されているが、両者は不整形な方形と長方形を呈し、隣接して構築されている。堅穴状遺構の西側は台地の肩部となり、殆ど遺構は存在しない。また、東側には土壙が近接して存在し、炉穴は南東側にやや隔てられて集中する傾向をみせている。堅穴状遺構を住居跡とする積極的な証左はないが、土壙、炉穴等との空間的な配置から、相互に有機的な関係が窺われ、堅穴状遺構に対して住居跡に準じる性格を付与しておきたい。該期の住居跡の検出例は乏しく、埼玉県内では散訪山遺跡（昭和1971）、金平遺跡（植木、金子 1980）等が知られるだけであり、該期に特徴的な炉穴が論じられる場合が多く、これ等の遺構論から昇華された生活様式の解明は論じられる機会が少なく、今後の課題と言えよう。この様な中にあって、本遺跡に於ける堅穴状遺構、炉穴、土壙の空間的な配置は出土土器の特徴と合わせて特筆されよう。

以上、明花向遺跡A区は遺構出土土器及びグリッド出土土器からみてもかなり時間的に限定されるものであり、野島式期の新しい段階に位置付けしておきたい。

明花向遺跡B区

出土土器は第I群、第II群、第IV群、第V群、第VI群、第VII群、第IX群、第X群土器であり、主体となるものは第I群、第IV群、第V群土器である。第I群土器は稻荷台式～稻荷原式に比定されるものであり、第IV群、第V群土器は田戸上層式以降～野島式以前に比定されるもので、從来、所謂子母口式として認識されてきたものである。

縄文時代の遺構として検出されたものは少なく、住居跡が1軒、炉穴が6基、土壙が4基である。住居跡は第I群土器の稻荷台式に比定される時期であり、不整形ではあるが方形を呈している。近年條痕文期の住居跡発見例が増え、その集成は原田昌幸氏の論考（原田 1983）に詳しい。本例も貴重な一例となろう。本例とほぼ同時期と思われる例は、近くでは宮代町前原遺跡（青木 1983）で検出されており、やはり方形、長方形を基調としたものになっている。グリッド出土土器は、住居跡出土土器と相前後して、少ない時間差内に位置付けられるものである。しかし、本遺跡からは

第Ⅰ群押型文土器は山形押型文の細片が1片しか出土せず、撚糸文土器との関連は認めなかった。

炉穴は複数の炉床が複合するものであり、撚糸文の出土するものも存在した。炉穴からは第Ⅳ群土器と第Ⅴ群土器が伴出しており、第Ⅴ群土器でも所謂子母口式段階以降の土器群は出土していない。

以上、造構と造構出土土器とはかなり限定された時期のものであり、本遺跡を主体的な出土土器で位置付けるとするならば、福荷台式～福荷原式期と田戸上層式以降野島式以前とすることができよう。

明花向遺跡C区

出土土器は第Ⅰ群、第Ⅱ群、第Ⅲ群、第Ⅳ群、第Ⅴ群、第Ⅵ群、第Ⅶ群、第Ⅷ群、第Ⅸ群、第Ⅹ群土器が検出されている。出土量の最も多いものは第Ⅴ群土器である。明花向遺跡の三区内でC区は一番面積が広いせいか、遺物出土量も多く、時期的に富豊である。しかし、造構から出土する土器は第Ⅴ群と第Ⅶ群土器である。

検出された造構は住居跡が1軒、炉穴が10基、土壙が21基である。住居跡は諸磯b式期に比定され、他にこの時期の造構は第3号土壙である。グリッド出土土器の諸磯式は住居跡の周辺に集中する傾向がみられた。また、第6号土壙は諸磯c式期所産と思われる。

炉穴からは全て第Ⅴ群土器が出土しており、第Ⅴ群の中でも野島式に比定されるものである。造構出土土器は、細隆起線のみで描出されるもの、貝殻腹縁文が施文されるもの、沈線で菱形文が描出されるもの等、かなりのバラエティーが存在する。全体的にみれば野島式の古い段階の土器が多いと言えよう。炉穴の配置は古い要素を持つ土器が出土したものと、新しい要素を持つ土器が出土したものとが混在とした状態を呈している。

他の造構に伴わない土器は、第Ⅱ群の押型文土器がB-3区に集中して出土した以外、散在とした出土状況を呈していた。

以上、明花向遺跡C区は検出された造構と造構内出土遺物から野島式期と諸磯b式期が主体となる。しかし、押型文土器、沈線文土器も比較的まとまって出土している。

明花上ノ台遺跡

出土遺物は第Ⅴ群土器と第Ⅶ群土器が主体を占め、第Ⅰ群、第Ⅸ群土器が若干出土している。第Ⅳ群土器は鶴ガ島台式のみであり、第Ⅷ群土器は黒浜式土器である。

検出された造構は住居跡が1軒、炉穴が2基、土壙が8基であるが、全て鶴ガ島台式期所産と思われる。しかし、第1号住居跡からは鶴ガ島台式土器と黒浜式土器が混在とした状態で検出され、住居跡内に黒浜式期の造構が存在していた可能性もある。調査時に於いては、黒浜式期の造構は確認出来なかった。鶴ガ島台式期の住居跡が検出されたことは特筆されよう。

以上、本遺跡は第Ⅴ群期では鶴ガ島台式期、第Ⅶ群期では黒浜式期の単純遺跡と理解される。

井沼方馬堤遺跡

出土遺物は第Ⅰ群、第Ⅳ群、第Ⅴ群、第Ⅵ群、第Ⅶ群、第Ⅸ群土器であり、出土量は少ない。その中で、第Ⅴ群、第Ⅶ群土器が主体を占めている。

造構は炉穴が10基と土壙が3基検出されているが、炉穴は炉床のみ存在するものが多い。出土土

器は全て条痕文系土器であり、文様を持たないため帰属時期が不明瞭である。第9号炉穴は条痕文土器でも若干古い様相の土器が出土し、第V群期所産と思われる。他の炉穴については、胎土に鐵雜を多量に含む土器が出土しており、他遺跡とは明らかに異なる土器群であるため、第VI群期に位置付けられるものと思われる。グリッド出土遺物の中には、茅山上層式以降の所謂在地の土器が出土しており、炉穴もその時期に比定されるものと思われる。グリッド出土遺物では東海系の入海I～II式段階の在地の土器、下吉井式土器等が出土している。

以上、本遺跡は、主体的には早期末の茅山上層式以降に位置付けられるものである。

とうのこし遺跡

出土土器は第I群、第V群、第VI群、第X群土器が少量出土している。遺構も検出されず、縄文時代の遺物合蔵地として性格付けがなされよう。

以上、6遺跡を遺構と出土土器から簡単に位置付けを行なったが、次に、時期別に相互の関連をみて行きたい。

第I群の撫糸文系土器は稻荷台式～稻荷原式に比定されるものが圧倒的に多く、大宮台地に於ける一つの特性と付合している。明花向遺跡B区が主な遺跡となり、C区でも少量出土している。

第I群の山形押型文土器は、その編年的な帰属が定まっていない現在、大宮台地に於いても遺構の検出と伴出資料に期待が寄せられている。明花向遺跡C区に集中して出土しており、稻荷台式～稻荷原式土器が出土しているB区では、僅か細片が1片のみ検出されているに止まるだけである。C区に於いても遺構は検出されず、伴出資料も不明瞭であった。しかし、出土した押型文土器は山形押型文のみであり、他の押型文を含まない事を指摘しておきたい。

第II群土器は明花向遺跡B区、C区から比較的まとまって出土している。遺構は検出されなかつた。第III群土器は三戸式、田戸下層式、田戸上層式に分類されるが、明瞭に三戸式、田戸上層式に比定されるものではなく、概ね田戸下層式とされるものである。B区、C区の田戸下層式を比較した場合、C区出土土器の方が若干古い様相を呈しており、両地点が隔れているため、或は時間的な差として捉えられるものかもしれない。

第VII群土器は時期的には田戸上層式から野島式以前に位置付けられ、第III群と第V群の一部に関連するものである。明花向遺跡B区に主体的に出土しており、C区からも若干出土している。

第V群土器は所謂子母口式とされている段階と野島式、鶴ガ島台式が出土している。所謂子母口式とされるものは第IV群土器と関連しながら明花向遺跡B区で検出されている。

野島式段階では、新旧が混在するが、主体となるのは古い段階の明花向遺跡C区と新しい段階のA区とが存在し、地点を異にして出土傾向が分かれれる。

鶴ガ島台式期では明花上ノ台遺跡が主体的に一時期で存在している。

第VII群土器は全体的に出土量が少なく、井沼方馬提遺跡があげられるが、詳細は不明である。比定される時期は茅山上層以降、早期末までである。

第VII群土器は黒浜式のみであるが、明花上ノ台遺跡で単純に出土している。

第VIII群土器は諸磯b式、c式が少量、明花向遺跡C区で出土している。

第VII群～第IX群土器は各遺跡から少量出土し、主体となる遺物ではない。

以上の様に、各時期、各遺跡によって出土遺物が分かれ、遺物出土傾向は比較的単純な様相を呈していると言えよう。

(2) 出土土器について

本報告書では、説明の都合上各遺跡出土土器を総合して分類したため、各遺跡ごとに出土土器の群分けは共通するが、類別は必ずしも一致するものではなく、その都度便宜的に区分を行った。そのため各遺跡出土土器の相互比較には不便なものとなってしまった。ここでは、それ等を総合して簡単な検討を加えたいと思う。出土土器は先述したが以下の様に分類された。群分けと出土土器の比定型式を対比させると、以下の様になる。

第Ⅰ群土器（井草式、夏島式、稻荷台式、稻荷原式）

第Ⅱ群土器（繩沢式タイプの山形押型文）

第Ⅲ群土器（三戸式、田戸下層式、田戸上層式）

第Ⅳ群土器 貝殻文系土器群

第Ⅴ群土器（所謂子母口式段階の土器群、野島式、鶴ヶ島台式、茅山下層式）

第Ⅵ群土器（入海Ⅰ～Ⅲ式併行、下吉井式）

第Ⅶ群土器（黒浜式）

第Ⅷ群土器（諸磯b式、諸磯c式、浮島式）

第Ⅸ群土器（加曾利E式）

第Ⅹ群土器（掘ノ内式、加曾利B式）

第Ⅺ群土器（安行Ⅱc式）

第Ⅰ群土器について

撚糸文系土器群前半期の土器は、明花向遺跡C区から井草式が1点、夏島式が2点出土し、明花上ノ台遺跡から夏島式が2点出土したのみである。他は全て稻荷台式から稻荷原式に比定されるもので、稻荷原式とされるものは明花向遺跡B区だけから検出された。ここでは明花向遺跡B区の資料を中心に、分類に従って検討を加えたい。撚糸文系土器は総数1,420点で、撚糸文土器が870点、無文土器が550点であった。再度分類を確認すると、口唇部形態は、

第1類 口唇部が肥厚せず、丸頭状を呈するもの。

第2類 口唇部が肥厚し、丸頭状を呈するもの。

第3類 口唇部が丸く肥厚し、外傾するもの。

第4類 口唇部が肥厚し、内端が直線的に立ち上り、外端が弓状に脹らみナデが施されるもの。

第5類 口唇部外端のナデが強くなり、面取り状になるもの。口唇が肥厚するものと、肥厚しないものとが存在する。

第6類 口唇が肥厚して外傾し、口唇下に幅広の凹線が存在するもの。

第7類 口唇が角頭状を呈し、上端が平坦に面取りされるもの。

第8類 口唇が肥厚して立ち、脣部が緩く脹らむもので、口縁部に凹線が巡るもの。

第9類、段状の造り出し及び沈線状の凹線によって口縁部無文帯が形成されるもの。

第10類、口唇が肥厚せず、角頭状を呈し、凹線により幅の狭い無文帯が形成されるもの。

の以上10形態に分類されたが、第8類、第9類には2~3種類の口唇部形態が存在し、実際10形態以上になる。副部に繩文が施文されるものは1点もなく、全て撚糸文であり、撚糸Rが圧倒的に多い。撚糸しが施文されるものは一割にも満たない。

撚糸は第9類を除いて、殆ど全てと言って良い程細い原体が使用され、帯状もしくは間隔を開けて雑に施文されるものであり、条間が皆開き気味のものが多い。第1類は口唇直下から撚糸文が施文されるものが多いが、口縁部に無文部を残すものも少數存在する。また、無文土器も存在する。第2類も第1類と同様であるが、口唇が肥厚するためか、口唇下に無文部を残す傾向が強くなる。無文土器も存在する。第3類は丸く肥厚する口縁部に撚糸の施文されないものがなくなるが、何点か口唇直下から施文されるものも存在する。無文土器も存在する。第4類、第5類は口唇部にナデが施されるため狭い無文部が形成されるが、両者とも無文部の幅を広くとる土器が存在する。また、無文土器も存在する。第6類は幅広の凹線によって区画された口縁部は無文帯となる。また、同種の無文土器は検出されなかった。第7類は口唇直下から撚糸文が施文されるものは少なく、無文部を残すものが多い。また、無文土器も存在する。第8類は凹線によって口縁部の無文帯が区画されたのが通常であるか、口唇部から撚糸文を施文するものも存在する。同形態の口唇部を持つ無文土器は検出されていない。第9類は副部にのみ太い撚糸文が施文され、無文土器も存在する。第10類は凹線下に撚糸文が施文されるが、凹線内にも施文されるものがある。無文土器も存在する。

以上、大まかに諸特徴をみてきたが、各類型には無文土器が存在する様である。

稻荷台式土器は1941年白崎高保氏により繩文時代最古型として位置付けられた。撚糸文土器の編年学的な研究がこれを契機に開始されたわけであるが、同年大原遺跡（吉田 1941）、翌年新井遺跡（江坂 1942）、井草遺跡（矢島 1942）が報告されて、比較検討による編年作業が進められた。その後、花輪台貝塚の報告（甲野 1949）、三浦半島に於ける平坂貝塚（岡本 1953）、大丸遺跡（芹沢 1956）、夏島貝塚（杉原 1958）、平根山遺跡（岡本 1958）、大浦山遺跡（岡本 1960）等の層位学的な発掘調査報告が相次ぎ、芹沢長介氏が提示した井草・大丸→夏島→稻荷台→大浦山・花輪台I→平坂・花輪台II式という編年基軸（芹沢 1954）が確立された。

この様な編年体系的研究に画期をもたらしたのは小林達雄氏による様式論を取り入れた研究である（小林 1966）。多摩ニュータウンNo52遺跡に於ける撚糸文土器の詳細な分析と研究を基に、撚糸文土器を繩文型（J型）、繩文・撚糸文型（J Y型）、撚糸文型（Y型）、無文型（M型）に分類し、文様帶及び文様変化の方向性から、撚糸文土器を第I様式～第V様式に分け、撚糸文系土器群の総合的な把握を試みた。しかし、撚糸文系土器群前半第I様式～第II様式までは詳細に検討されていたが、後半第IV様式・第V様式については資料的な制限もあり、充分に論及されてはいなかつた。

同年、稻荷台式土器に後続するものとして稻荷原式土器が提唱され（安岡 1966）、これを契機とし、撚糸文系土器群終末期の研究が盛んとなり、土器群の地域的な動態の相互比較と無文土器との関連から、終末期の様相が明らかにされつつある。

稻荷原式提唱後、ニッ木向台式（江森、滝沢 1968）が設定され、撚糸文土器と無文土器が分離されたが、後に庄司克・堀越正行両氏によって同遺跡の資料が提示され（庄司、堀越 1974）、稻荷原式類似土器の確認と花輪台Ⅰ式、Ⅱ式の併存が考察された。花輪台Ⅰ式、Ⅱ式の併存論はすでに岡本孝之氏によって論じられており（岡本 1972）、花輪台式の内容及び、大浦山式、稻荷原式との関係が研究される契機となった。

その後、各型式の内容検討と細分案が提示される様になり、白石浩之氏は、夏島古期→夏島新期・稻荷台古期→稻荷台新期の細分案を示した（白石 1973）。1974年二宮神社境内遺跡で稻荷原式と押型文土器とが併出し、撚糸文土器と押型式土器との関連が明らかになると、これ等の資料を基に谷井彪氏は、鶴ヶ丘C区→稻荷原→二宮神社境内という変遷観を示し、事実上稻荷台式と稻荷原式を細分した（谷井 1976）。

一方、稻荷原式に関する研究に対して、花輪台式の研究も進展した。生谷境堀遺跡（横山 1974）では縦条体圧痕文と刺突文を主文様とする土器群が検出され、花輪台式のバラエティーとして把握された。その後、縦条体圧痕文による羽状ないし幾何学的文様を特徴とした全堀式（篠原 1977）、口縁に爪形文、沈線文を持つ石神式（鈴木 1979）が提唱されている。また、近年では口縁部に糸沈線の巡る無文土器が藤の台遺跡（原田 1980）、東山遺跡（宮崎 1980）に於いて検出され、撚糸文系土器群の最終末に位置付けられた。これ等の資料を基に、宮崎朝雄氏は撚糸文系土器群終末期から無文土器群への変遷を、稻荷台式新・稻荷原式古→稻荷原式新→東山・栗原式の三段階に捉え、関東西南部、中央部、東部の地域的な動態を総合的に示した（宮崎 1981）。撚糸文系土器群終末の研究が活発に行なわれているのに対し、夏島式、稻荷台式の研究は停滞の感がある。この様な状況に対して、早川泉氏は岡本孝之氏（岡本 1972）、白石浩之氏（白石 1973）の夏島式、稻荷台式併存論を無批判に受け入れていたためとし、分離論を唱え、夏島Ⅰ式→夏島Ⅱ式→稻荷台Ⅰ式→稻荷台Ⅱ式という細分案を提示した（早川 1983）。

以上、研究史の概略をみてきた。稻荷台式以降、土器群は地域性を顕在化しており、これ等の分明には稻荷台式からの変化の様相及び内容の検討が必須となろう。本遺跡出土土器は口縁部の特徴、胴部撚糸文の在り方から、稻荷台式～稻荷原式にかけての特徴と類似する。そのためタイプサイトである稻荷台遺跡と稻荷原遺跡出土土器の特徴と本遺跡出土土器の比較を行なう必要が生じる。

稻荷台遺跡（白崎 1941）から出土した土器の口縁部形態は9種が存在し、a～c類に大別されている。詳細な説明はなく、図示されたものから読み取ると、a種は口縁が肥厚せず、口唇部が丸頭状、やや尖るもの、尖るもの、外削ぎ状のものである。b種は口唇がやや肥厚して、外削ぎ状を呈するものと、口唇が肥厚して丸味を帯びるものであり、後者は外側に肥厚するものである。c種は口縁があり肥厚せず、比較的太い沈線が巡るものである。

文様はa種で口縁部から、b種で肥厚部下から、c種で沈線下から施文されており、撚糸文が殆どで、細い撚糸、撚らない紐状のもの、太い撚糸が使用される。撚糸文が帶状施文されるものも存在する。他に山形押型文土器が2点、繩文施文土器が3点出土している。

稻荷原遺跡（三友、安岡 1966）出土土器は撚糸文土器がⅠ群、無文土器がⅡ群に分類され、それぞれ口縁部形態の相違で類別されている。

Ⅰ群1類は口唇部の肥厚度合が弱く、円頭状を呈するもの。2類は口唇部が肥厚して無文となり、口唇部下に太い凹線または1段の稜が形成されるもの。3類は口唇部が肥厚して無文となり、頭部が単に括れるもの。4類は口唇部があまり肥厚せず、撫糸文が装飾的に施文されるものである。撫糸文は1類、5類が細いもので、他は太目のものであり、明確に帶状施文されるものは1類に多く、他は少ない様である。

Ⅱ群1類は口唇部が肥厚して外反し、頭部が括れるもので、Ⅰ群3類の無文土器である。2類は口縁部に1条の凹線が巡る。3類は丸棒状を呈する口縁部が内傾するもの。4類は口唇部が丸棒状を呈し、口縁部に1条の細沈線が巡る。5類は口唇部があまり肥厚せず、丸頭状を呈し、器壁の薄いものである。

上記の様に両遺跡での分類を簡単にまとめてみたが、本遺跡出土土器との比較を行ないたい。

第1類は稻荷台遺跡a類、稻荷原遺跡Ⅰ群1類、Ⅱ群5類に相当する。第2類は口唇部外側に肥厚するものが大半であり、夏島式にみられる口唇部の丸味や、口唇部内側が肥厚するものは殆どない。第3類は口唇部が折り返しによって造出されるものと思われ、第1類、第2類とは異なる。稻荷台遺跡b類に相当すると思われるが、図示された口唇部形態とは若干異なる。稻荷原遺跡では、Ⅰ群3類、Ⅱ群1類の中に同様な資料がみられる。第3類は第1類、第2類よりは後出的な感じを受ける。第4類は第2類の口唇部外側にナデが施され、面取状になるものであり、同様に第5類は第1類の変化形態として捉えられよう。しかし、口唇部外側のナデが強く施され、外削ぎ状を呈することは、第4類からの変化形態とも考えられる。稻荷台遺跡a類の中に存在し、稻荷原遺跡ではⅡ群1類中に含まれる。第6類は第3類の窪み状のものが幅広の凹線化したものと捉えられ、口縁部無文帯造出への一步を踏み出しているものと思われる。稻荷原遺跡のⅠ群3類、Ⅱ群1類に相当する。しかし、口唇部の肥厚状態や凹線化の度合から第6類は稻荷原例よりは後出的である。第7類は口唇部が角頭状を呈し、上端部が平坦に成形されるもので、稻荷台遺跡、稻荷原遺跡では見られない。第8類は第6類に比し、凹線が幅狭となり口縁部文様帯が拡張するもので、口唇内面が直線的に造出される点で異なる。稻荷原遺跡Ⅰ群2類に類似するが、口唇部の造出と撫糸原体の太さに相異がみられる。第8類中には口縁部まで撫糸文の施文される例があり、口縁部無文帯が完全に確立した段階とは言えない。第9類は口縁部無文帯が確立した段階であり、段状による造出と沈線状回線による造出とが存在する。後出は稻荷原Ⅱ群2類に相当するが、前者の段状に造出する手法はⅡ群2類中に僅かにみられる。第10類は両遺跡とも相当する資料はない。稻荷原遺跡Ⅱ群2類中に角頭状口唇部を持つ土器が存在するが、本類とは異なるものである。

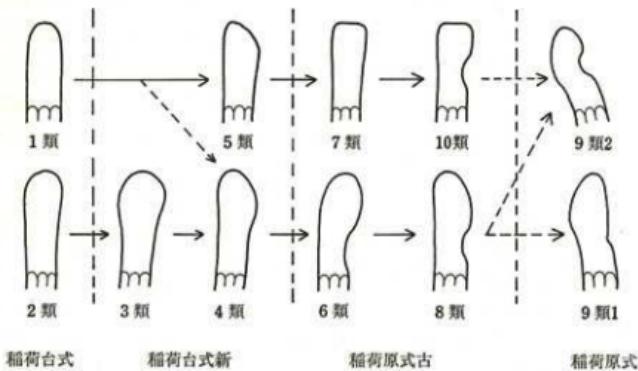
本遺跡出土撫糸文系土器群は稻荷台遺跡と稻荷原遺跡との比較から、両遺跡に共通する部分が多く、口唇部形態の推移過程も捉えられるものである。口唇部形態の変化から本遺跡出土土器を段階的に分類すると、第1類・第2類→第3類・第4類・第5類→第6類・第7類・第8類→第9類と、いう四段階の変遷が推定される(第266図)。脇部撫糸文との関係は第三段階まで細い撫糸文が施され、第四段階で太い撫糸文となる。そして、第三段階の中には撫糸が太くなる傾向が窺われる。

稻荷台遺跡、稻荷原遺跡とも口唇部形態を見る限り、單一時期の所産ではなく、本遺跡の分析を参考にすると何段階かの変遷が推察される。稻荷台遺跡は白石浩之氏によって稻荷台式の新段階に

位置付けられ(白石 1973)、また、早川泉氏によても稻荷台式のⅠ段階に位置付けられている(早川 1983)。一方、稻荷原遺跡は谷井彪氏により稻荷原式の古段階に位置付けられ(谷井 1976)、宮崎朝雄氏によりⅠ群1類・Ⅱ群5類→Ⅰ群3類・4類・Ⅲ群1類・Ⅳ群2類→Ⅴ群3類・4類という三段階の変遷過程が示された(宮崎 1981)。この様に一道跡内に於いて何段階かの変遷が想定される土器群が出土することは極く一般的なことであり、むしろ、單一時期の遺跡をみつける方が困難である。本遺跡に於いても、住居跡を中心としてその周辺に遺物が集中する傾向にあり、当初一期の所産と想定したが、口唇部の形態比較等から少なくとも10種類以上が類別され、本土器群は少なからず時間幅を持つ事が確認された。しかし、いずれが確実に共伴関係にあるのかは不明であり、遺構出土の伴出関係及び詳細なる型式学的な検討を経て、検証されるべきものである。ちなみに本遺跡から唯一検出された住居跡からは、本遺跡第1類から第5類までが出土しており、また、同無文土器も出土している。概ね伴出資料とすることが可能であろう。

本遺跡出土土器の類型を他遺跡と比較してみると、第1類から第5類は混在して出土する場合が多く、新井遺跡(江坂 1942)、千歳遺跡(野口 1951)、大丸遺跡(芹沢 1956)、港北ニュータウン東方第7遺跡(十菱 1976)、はけうえ遺跡(実川 1980)、多聞寺前遺跡(井口 1982)、東京天文台構内遺跡(今村 1983)、多摩ニュータウンNo.205(原川 1982)、下里本邑遺跡(井口 1982)、鶴ヶ丘遺跡(谷井 1976)、前原遺跡(青木 1983)、石神遺跡(鈴木 1977)、木の根遺跡(宮 1981)、中野木新山遺跡(今橋 1977)等、広範な分布状態を呈し、枚挙に遙がない。しかし、上記の遺跡は、本遺跡第1類、第2類を中心とする遺跡と第3類~第5類を中心とする遺跡とに分かれる傾向にあり、前者に大丸遺跡、千歳遺跡、港北ニュータウン東方第7遺跡、東京天文台構内遺跡、中野木新山遺跡、後者に稻荷台遺跡、鶴ヶ丘遺跡を位置付けられよう。特に鶴ヶ丘遺跡は無文土器が多く91%を占めると言うが、本遺跡では39%であった。

第6類~第8類・第10類は、口縁部無文帯が形成される方向へ、攲系文が太くなる方向へ、無文土器が増加する方向へと変化する段階であるが、先にも述べたが、必ずしも全てがその様に変化す



第266図 口唇部形態変遷模式図

るのではなく、その兆が窺われる段階である。稻荷台式の新段階から稻荷原式までの間には、稻荷原遺跡Ⅰ群3類、Ⅱ群1類、本遺跡例が介在するものと思われ、鶴ヶ丘遺跡はこの前段階、つまり、稻荷台式の新段階に位置付けられよう。他遺跡では石神遺跡第4類、第8類の一部、貫井遺跡（中西 1978）、前原遺跡第Ⅱ群第6類第3種等に同傾向が窺われる。

さて、第9類であるが、第6類～第8類、第10類から直接的に変化したとしてはギャップが大き過ぎる。この間一段階位が想定され、稻荷原遺跡Ⅰ群2類、Ⅱ群2類相当の土器群が想定される。第9類第1種は口縁部無文帯が確立し、擦糸が太くなり、器面全面が丁寧に研磨されるもので、口縁部外面直立、内側肥厚を特徴とする。第2種は幅狭な口縁部無文帯の凹線区画が特徴で、胸部は膨らみを帯び、口唇は胸部より器壁が薄く丸頭状となるものである。第2種は稻荷原遺跡Ⅰ群2類、Ⅱ群2類の一部に類似するが、ノーマルに比定は出来ない。

第9類第1種は口縁部無文帯造出に特徴があり、大宮台地では類例の少ないものである。稻荷原遺跡Ⅰ群2類中に1点だけ同手法がみられるが、両者の口唇部形態は異なっている。類例を求めるに、関東東部の稻荷台式以降の稻荷原式類似の土器があげられる。外側直線内側肥厚の口唇部を段状に造り出す手法は、花輪台遺跡出土の稻荷原式（吉田 1949）、二ツ木向台遺跡（江森、滝沢 1968）等があげられ、武藏野台地では市場坂遺跡（滝沢 1968）、新井遺跡、大宮台地では前原遺跡で検出されている。本遺跡と比較的近くに位置し、類似する資料は前原遺跡第Ⅱ群第6類第4種が相当しそうであるが、若干様相を異にしている。花輪台遺跡、市場坂遺跡例は口唇内側が肥厚する点で類似するが、若干後出的な感じを受ける。また、二ツ木向台遺跡例は口唇部が角頭状になる点で異なる。また、本遺跡では第三段階に位置付けた第10類は、口唇部の形態、凹線等これ以降の変遷に興味が持たれる資料である。

稻荷台式以降、口縁部無文帯確立の方向へ、擦糸が太くなる方向へ、無文土器が多くなる方向へと一歩づつ変化する過程の中で、これ等の動態を大局及び詳細な資料の検討から、系統性を明確にし、地域性及び段階分けを行う必要を痛切に感じる。

最後に本遺跡が、第Ⅰ段階…第1、2類→第Ⅱ段階…第3～5類→第Ⅲ段階…第6～8、10類→第Ⅳ段階…第9類へという変遷過程を経たであろうという可能性を指摘しておきたい。また、現在稻荷台式新段階と稻荷原式古段階の併存関係が大方の認めるところであるが、本遺跡の如く、系統的に区分できるものであるならば、両型式の変遷過程はスムーズなものとして理解できるのではないかろうか。以上、第Ⅰ段階を稻荷台式、第Ⅱ段階を稻荷台式新段階、第Ⅲ段階を稻荷原式の古段階、第Ⅳ段階を稻荷原式と考えて置きたい。

第Ⅱ群土器について

本群は押型文系土器群であり、明花向遺跡C区で31点とB区で1点検出されている。全て山形押型文であり、他は検出されていない。口縁部破片は1点もなく、全て、頸部から胸部にかけての破片である。山形押型文は帶状施文されるのが特徴的で、頸部付近で横位に胸部で縦位に施文されている。器壁は胸部で7～8mm位、頸部で5～6mm位を測る。以上、樋沢式土器の特徴と類似するため、本遺跡出土土器を樋沢タイプの押型文土器と呼ぶことにする。

本遺跡出土樋沢式タイプの押型文土器は2～3個体分と思われ、原体の幅が2cm強を測り、1回

転で2山が描出されるもので、山形の条は4～5本を数える。器面に対して比較的浅く帶状施文されるわけであるが、帶状間にはいずれの破片も、丁度一原体分程の間隔が開けられている。C区からは撚糸文土器も少量出土しており、井草式～福荷台式まで存在するが、福荷台式が多かった。山形押型文が比較的集中して出土する傾向があるのに対し、撚糸文土器の出土状態はまばらであり、調査時点で押型文土器は撚糸文土器との段階に伴うかは判然としなかった。

押型文土器は系統論と上限の問題及び撚糸文土器との伴出関係が問われて来たが、現在、撚糸文土器と確実に伴う例が二例ほど知られている。一例は東京都秋川市二宮神社境内遺跡（土肥 1974）から出土したもので、2号址という同一遺構から伴出したということのみならず、同一範囲に撚糸文と山形押型文が使い分けられているという、疑う余地の無い共伴関係である。写真図版のみ示されているため口縁部形態は不明であるが、写真から判断するに撚糸文土器は口唇部が丸味を帯びるもので、中には口唇部外面が弓状に肥厚するものも存在する。口縁部無文帯は沈線というよりも段状の成形によって造出され、本明花向遺跡B区出土第9類の手法に類似するが、口唇部形態は若干異なる様である。一方、押型文土器は口縁部が段状に成形されるというよりも、沈線で区画されるものであり、全体の感じは無文土器と類似する様である。山形文が縦位に施文され、部分的に難に磨消される手法は第1群b類中にみられる磨消手法に通じるものがある様に思われる。福荷原遺跡I群2類を以って福荷原式とすると、谷井氏が指摘する（谷井 1976）様に二宮神社境内遺跡例は福荷原遺跡より新しく位置付けられようが、無文土器をみるとさほど時間差のない物の様にも思われる。

また、もう一例は千葉市東寺山石神遺跡で出土したもので、胴部破片に撚糸文と山形押型文が同時に施文されるという珍しいものである。報告では同遺跡内出土土器との撚糸文の類似性から、夏島式に比定される可能性の高いことが示唆されている。

いずれにしても、撚糸文系土器群終末の福荷原式段階には確実に山形押型文土器が伴出するものと推察され、二宮神社境内遺跡例からすると、この段階の山形押型文は後出的なものである。振り返って明花向遺跡C区の押型文土器は、その特徴から樋沢式に近く、二宮神社境内遺跡例より前出的なのは明白である。

樋沢式土器は1955年（戸沢 1955）に層位的事実により細久保式と分離されて型式設定されたが、その内容は山形文が主体を占め、以下精円文、斜繩文、撚糸文、特殊な押型式、無文等が存在し、山形文は直交する帶状施文が特徴的とされた。その時点での細久保式の捉え方は、非帶状施文が特徴とされており、後日、細久保遺跡が報告されて（松沢 1957）、改めて樋沢式との系統性の強いことが確認された。近年、樋沢遺跡の第Ⅱ次調査の報告（岡谷・塩尻市教委 1982）や細久保式の再検討についての論考（片岡 1982）が相次いで刊行され、押型文土器研究は型式内容の再検討が迫られている。しかし、その上限については片岡肇氏を代表とする神宮寺系土器を草創期後半押圧繩文、格条体压痕文土器に対比する考え方（片岡 1972）と、可児通宏氏に代表される山形押型文土器を撚糸文系土器の時期に比定する考え方（可児 1969）とが対立し、見解の一致をみない。前者は岡本東三氏（岡本 1981）による原体の復原と施文法研究等から編年観が一掃されており、後者は撚糸文土器前半期との確実な伴出資料がなく、予察に止まらざるを得ない状況を呈している。

では、明花向遺跡C区出土の押型文土器はどの段階に編年付けられるであろうか。出土傾向からみればB区の稻荷台式～稻荷原式にかけての段階では細片が一片しか出土しておらず、この遺跡でのこの段階では共伴事実は認められない。しかし、第Ⅲ群3類中には明らかに撚糸文を磨消する手法がみられ、押型文土器の帶状施文と何らかの関連があるものと推察される。比較的難に施文された撚糸文に磨消手法がみられることから、むしろ、押型文土器からの影響を考えることも可能であろう。この事は、B区から古手の稻荷台式があまり出土していない事、C区で夏鳥式と稻荷台式の撚糸帶状施文の整然としたものが出土している事等が、説明にも傍証しているものと思われる。本遺跡例の様に押型文の直交帯状施文が比較的整然としている例として、県内では北坂遺跡（中島 1981）、屋田遺跡（今井 1983）、東中尾遺跡（安岡 1964）等があげられる。また、他県では東方第7遺跡（十菱 1972）、多摩ニュータウンNo.269遺跡（可児 1967）、竹之内遺跡（馬目 1982）等で出土しているが、竹之内遺跡は樋沢式段階に比定されるものと思われ、本遺跡例の方が施文法等からみて後出のものと判断される。しかし、竹之内遺跡では普門寺式タイプ、細久保式タイプの縱位密接施文手法がみられ、今後、これ等型式間の関連が問題となるであろう。また、帶状施文の間隔が狭くなったり、密接施文されるものは多くの遺跡から検出されており、橋立岩陰遺跡（芹沢・吉田 1967）、稻荷原遺跡（安岡 1966）、東山遺跡（宮崎 1980）、大丸山遺跡（安岡 1979）、勝負沢洞窟遺跡（埼玉県 1980）、千歳遺跡（野口 1951）、新井遺跡（江坂 1942）、多摩ニュータウンNo.205遺跡（原川 1982）等、枚挙に邊がない。大方、検出される撚糸文土器が稻荷台式の新段階以降の押型文土器は、密接施文の傾向が強くなったり、梢円文、菱形文土器を併出したり、沈線文土器と一緒に検出される場合が多く見受けられる。前原遺跡（青木 1983）では変形山型押型文が、おおよそ稻荷原式を主体とする土器群の中で検出されている。この様に、稻荷台式の新段階以降、押型文土器にも変貌が窺われ、ある意味では、撚糸文系土器が地域色を顕在化する傾向に契合するが如く、押型文系土器群にも前代からの堅固な規範が弛緩する傾向を指摘出来るのかも知れない。しかし、皮肉なことに戸沢充則氏の言を借りれば「撚糸文土器群には、まとめて押型文土器が併出してはいけないのだという前提があるかのよう」（戸沢 1978）に、その共伴関係は不明な点が多いのである。ここではC区出土押型文土器を一応、稻荷台式の古い段階に考えて置きたい。

第Ⅲ群土器について

第Ⅲ群土器は沈線文系土器であり、明花向遺跡B区とC区で比較的まとまって出土した。第Ⅲ群土器は三戸式、田戸下層式、田戸上層式に区分される。B区とC区では出土遺物に相違がみられ、遺跡ごとに簡単に検討を加えたい。

B区の第1類は細沈線文土器であり、集合細沈線を異方向に組み合わせるものである。第2類は平行細沈線文帯に梢円の刺突列が施文されるもので、第3類は刺突の代わりに貝殻腹縁文が施文されるものである。第4類は太沈線文土器で、併行、斜位、曲線が描出される。第5類は細沈線で乱雑な斜格子目文が描出され、第6類は波状文を描出するものである。第7類は無文土器で、第8類は底部である。第9類は細隆帯と沈線が組み合わされるものである。

C区の第1類は細沈線による帶状格子目文土器である。第2～4類は水平の併行沈線文土器であり、太沈線を深く施文するもの、凹線状のもの、半截竹管内側を使用して平行沈線を施文するも

の、断面「V」字状を呈するもの、浅い凹線状の短沈線を施文するもの等が存在する。第5類は太沈線と細沈線が組み合わるもので、第6類は無文土器である。

B区第1類とC区第1類は概ね三戸式土器に比定され、C区第2～4類は伏見式に比定されよう。三戸式土器については近年三戸遺跡の資料が公開されたり（神奈川県 1979）、西川博孝氏による細分案（西川 1980）が示され、また、常陸伏見遺跡の報告書（小野 1980）が刊行されて伏見式が提唱される等、俄に研究が進展してきた。

伏見式は凹線文を特徴とする土器で、稻荷原型三戸式土器より下層から検出され、層位的な事実を以って型式設定されている。稻荷原型三戸式土器を三戸式の中でも新しく位置付けるのは西川氏も同様であり、氏は稻荷原型三戸式土器より古い段階に福島県大平遺跡（竹島 1949）、神奈川県三戸遺跡、埼玉県梅所遺跡（安岡 1966）等を位置付けている。大平式とされるものは、併行沈線文と帶状格子目文とが特徴的であり、三戸遺跡出土土器と酷似する。これ等併行沈線文土器と伏見式土器との関連が問題となろう。また、西川氏は三戸式と大平式の発生を、撫糸文土器との関係は不明であるが、東北地方押型文土器との系統関係を強く認めている。しかし、撫糸文系土器終末に位置付けられるであろう石神式には、沈線文系土器群への推移が窺われ、東北地方押型文土器の沈線化の方向と軌を一にしているのか、また、影響を受けて沈線化するのかが今後の問題となるであろう。石山式にみられる口縁部の山形沈線は、三戸式土器の口縁部にみられる鋸歯状沈線に移行する要素を充分に保有しているものと思われる。また、竹之内遺跡（馬目 1982）で初期沈線文系土器とされた一群は、同遺跡出土の日計型押型文系土器と類似し、やや雑ではあるが三戸式土器にみられる鋸歯状沈線文土器と、視覚的には同一効果をもたらすものと思われる。この様な状況の中で、伏見式がどこまで漸くかが問題であり、また、稻荷原型三戸式土器及び田戸下層式との関連が不明であると言わざるを得ない。

C区第3類は胎土に砂粒を多く含み、器表面がざらつくのが特徴的で、他のものと明確に識別できる。深くて長い沈線と浅い短沈線とが存在するが、土器の顔付き、口唇部形態等両者を分離する要素はなく、両者はバラエティーとして捉えられるものであろう。また、無文土器も同時期のものと思われる。同様な土器が出土した遺跡として、近隣では浦和市井沼方遺跡（小倉 1981）や、如来堂A・C遺跡（宮崎 1980）があげられる。

C区第2類、第4類は胎土に砂粒を多く含み、擦痕状の器面調整がみられ、所謂田戸下層式とは胎土、顔付きが異なる。三戸遺跡出土土器に類似する。浦和市梅所遺跡、大宮市稻荷原遺跡に同様なものがみられる。

B区では伏見式類似の土器は出土しておらず、稻荷原型三戸式タイプのものと雑な細沈線の土器とが出土している。第92図1は口唇部に刻目が存在し、珍しいものであるが、あるいはこの類からはずれるものかもしれない。

B区第2類、第3類は、梢円の刺突列と貝殻腹縁文が異なるだけで、土器の顔付きは類似する。これ等は、細沈線文帯が重層する点で稻荷原型三戸式土器に類似し、同時期のバラエティーであるのか、田戸下層式に含まれるのかは細片であるため不明であるが、田戸下層式としても古い段階のものであろう。

B区第4類、C区第5類は器面が良く研磨される土器で、田戸下層式に比定される。B区第5類は三戸式から系統を引くものと思われ、格子目文は乱雜な描出となっている。田戸下層式の中でも古い段階に位置付けられよう。

B区第6類は波状文が描出され、珍しいものである。波状文として、下吉井式が想起されるが、胎土、顔付き等異なる。あるいは田戸上層式に含まれるものかもしれない。B区第9類は細い隆帶上に刻目が施され、沈線が施文されるものである。器壁が薄く、良く研磨され、赤褐色を呈するため、田戸上層式と考えて置きたい。近隣の遺跡では浦和市和田遺跡（青木 1982）で比較的まとった資料が出土している。C区出土の無文土器は、口唇部内外端に刻目が施され、和田遺跡と共通した手法がみられる。また、この無文土器は貝殻腹縁文が波状に施文される土器の口唇部形態と酷似し、第Ⅴ群土器の中に共通項を見い出すことができる。

第Ⅳ群・第Ⅴ群土器について

第Ⅳ群土器は本来貝殻沈線文系土器群に包括されるべきものであるが、本遺跡出土の田戸上層式もしくはそれ以降の土器群に、貝殻文と沈線文の複合する土器は存在せず、三戸式、田戸下層式段階の土器群と区別するため、貝殻文系土器群として分類した。また、第Ⅳ群土器は田戸上層式以降、条痕文系土器群前半期までと分類した第Ⅴ群土器と緊密な関係にあり、ここでは第Ⅴ群の特に野島式以前の土器群との関係をみて行きたい。

第Ⅳ群土器は、明花向遺跡B区から比較的まとまりを持って出土し、同C区、明花上ノ台遺跡、井沼方馬堤遺跡からも若干出土している。以下、特徴をまとめてみると、

- ①…口縁に沿って貝殻腹縁文が施文される土器で、貝殻腹縁文は横位乃至は小波状を呈するものである。（C区第Ⅳ群第1類）
 - ②…口縁下に1条の貝殻腹縁文が横位に施文されるもの。（C区第Ⅳ群第2類）
 - ③…縱位貝殻腹縁文の押し引き手法による帯状施文で、モチーフを描出するもの。（B区第Ⅳ群第1類）
 - ④…口縁下に貝殻腹縁文が縱位に施文されるもので、密接施文されるものと間隔を開けて施文されるものとが存在する。（B区第Ⅳ群第2類、C区第Ⅳ群第3類）
 - ⑤…口縁下に貝殻腹縁文が斜位に施文されるもので、この種の土器は纖維を少量含み、貝殻条痕文の施文される場合が多い。（B区第3類）
 - ⑥…口縁下に貝殻腹縁文を縱位に施文し、押し引き様に水平移動して刺突列が施文されるもの。（B区第Ⅳ群第4類）
 - ⑦…角頭状を呈する口唇部に貝殻腹縁文による刻目が施されるもの。（B区第Ⅳ群第5類）
- に分類することが可能である。①～⑦の土器群は器壁が比較的薄く、口唇部形態が角頭状を呈することで共通し、胎土に砂粒を含むものの、緻密で堅緻な点が特徴的である。纖維を含むものと含まないものとが存在し、含む場合でも極少量である。貝殻条痕文は⑤と⑦にみられるが、他の土器は器面調整が纖維質のもの又はヘラ状工具によって行なわれるものと思われ、その結果擦痕又は条痕状の擦痕がみられるのが特徴的である。貝殻文系土器では明確に貝殻条痕文と判別されるものは少ない。

以上の貝殻文系土器の保有する諸特徴は、第Ⅴ群土器の初頭に位置付けられる土器群と共通する点が多い。第Ⅴ群土器は明花向遺跡B区から、また、第Ⅴ群初頭の土器群もB区から主体的に出土している。B区に於ける第Ⅴ群土器は、刺突文土器、縦条体圧痕土器、無文土器に大別される。

刺突文土器は、

①…角頭状の單一施文具により、押し引き状の刺突列が縱位、斜位、鋸歯状に施文されるもの。

(B区第Ⅴ群第1類第1種)

②…①と同様の刺突列が口縁下に何段かに亘って水平に施文されるもの。(同上第2種)

③…角頭状を呈する口唇部に①、②と同様な施文具を突き刺し、刻目を施すもの。(同上第3種)
に類別でき、土器の顔付き、胎土、器面調整等、貝殻文系土器と酷似する。

縦条体圧痕土器は、

①…口縁下に斜位の縦条体圧痕文が帶状に施文されるもの。(B区第Ⅴ群第2類第1種)

②…沈線で区画された幅狭の口縁部文様帶に縱位の縦条体圧痕文が施文されるもの。(同上第2種)

③…断面がカマボコ状を呈する隆带上に縦条体圧痕文が施文されるもの。(同上第3種)

④…角頭状を呈する口唇部に縦条体圧痕文が施文されるもの。(同上第4種)

に類別でき、土器の顔付き、胎土、器面調整等、貝殻文系土器、刺突文土器と酷似する。

無文土器の無文とは有文無文の時の意味と、器面に貝殻条痕文が施文されるか否かの時の意味が存在するが、ここでは後者の意味で使用したい。無文土器は無文といつても器面に全く何等の痕跡も存在しないというものではなく、貝殻条痕文以外の擦痕が認められるもので、擦痕の中には貝殻条痕文に近い条痕状を呈するものも存在する。その様な意味では擦痕文土器とでも呼称できよう。

無文土器も貝殻文系土器、刺突文土器、縦条体圧痕文土器と顔付き、胎土、器面調整、口唇部形態等酷似する。

上記した四者の土器は明花向遺跡B区からほぼ限定されて出土しており、土器群の諸特徴から、同一キャンバスにおける類似意匠文描出上の施文具選択の相違によるものと思われる。次に個別の検討を進めてみたい。

貝殻文系土器①は顔付きが他と異なり、器面は磨かれている。口唇部内外端に施される刻目は、和田遺跡(青木 1982)にみられる田戸上層式に類似し、本例も田戸上層式に比定されると思われる。しかし、所謂該期の沈線文土器は殆ど出土せず、貝殻文の施文手法も城ノ台貝塚(吉田1955)、や新東京国際空港Na14遺跡(野口 1983)出土土器と異なる。ここでは、一応他の貝殻文系土器との関係から、田戸上層式の新しい段階に位置付けておきたい。

貝殻文系土器③は施文手法が特徴的であり、類例の乏しいものである。しかし、近年報告された福島県竹ノ内遺跡(馬目 1982)では該期の良好な資料が多量に出土している。本例は竹ノ内遺跡で大寺・常世式期とされたものと類似する。

また、貝殻文系土器④～⑥は口縁部の幅狭な文様帶を形成するもので、③とは若干異なる。貝殻文系土器⑥の手法は刺突文土器②の手法と類似し、貝殻文系土器③は刺突文土器①と文様効果と手法が類似する。また、縦条体圧痕文土器①は貝殻文系土器④～⑥と同一効果をもたらす。縦条体圧

痕文土器③は隆帯を使用する点で異なるが、同種の隆帯は竹ノ内遺跡や多摩ニュータウンNo.269遺跡等で出土している。縦条体原体はNo.269遺跡で守孫子昭二氏が分析したもの殆どを含んでいる。更に、貝殻文系土器③の口唇部には縦条体圧痕文が施文されており、以上、貝殻文系土器、刺突文土器、縦条体圧痕文土器は密接な関係にあることが理解される。これ等の土器の中で新旧関係を求めるにすれば、貝殻文系土器⑤と縦条体圧痕文土器②を若干後出的な要素を含むものとして考えることも可能であるが、積極的に区分する根拠はない。

子母口式段階の確認

明花向遺跡B区出土土器を統計的に示すと、第Ⅳ群、第Ⅴ群土器は総数5,127点であり、有文土器120点、無文土器4,556点、表裏条痕文土器126点、表条痕文土器257点、裏条痕文土器66点である。有文土器の占める割合は2.3%、無文土器と条痕文土器の比は9:1であり、無文土器が圧倒的に多い。有文土器と無文土器の口縁部数の比は1:2である。出土総数からすれば有文土器の卓める割合は低いが、口縁部数の比較では1:2という高い割合を示すのは、有文、無文土器の胸部破片が共通するためであろう。有文土器のうち貝殻文系土器は47.8%、刺突文土器は28.3%、縦条体圧痕文土器は23.9%を占めている。これ等が明花向遺跡B区における田戸上層式以降野島式以前の所謂子母口式段階土器群の組成である。土器の分析から同一時期における組成内容として大過ないであろう。

子母口式が山内清男氏によって型式設定（山内 1930）されてから半世紀の月日が流れた。「最古階層の繩紋土器」を追求する研究の流れの中で、子母口式は型式学的方法論により、茅山式以前、三戸式以後に位置付けられた。その後、具体的な資料が「日本先史土器図譜」（山内 1941）に示され、現在、我々の認識する子母口式の概念が確立された。型式内容を要約すると、纖維を微量に含むものが多く、貝殻の腹縁による条痕も少數あるが、もっと柔軟なものを擦り付けた跡（擦痕）も多い。纏文は殆ど見られない。器形の変化は殆ど無く、器壁の彎曲も少なく、底は尖底のものが多いが、小形の平底も幾分ある。土器外面に装飾の全く無いものが多い。文様のあるものは稀で、細い隆線、太い隆線、点列の文様、沈線の文様、縦条体圧痕文が存在する。提示された資料は子母口貝塚と大口坂貝塚のものであり、両者を分離して比較すると若干異なる点も存在する。

子母口式設定以来、各氏による子母口式の型式内容の相違がみられたのは事実であり、今日茅山上層式以降に比定される土器群も子母口式に比定されていた。これ等の経緯については小川和博氏（小川 1981）、毒島正明氏（毒島 1983）により、研究史を紐解くことによって詳細に述べられている。

子母口式が確たる層位学的な根拠からではなく、型式学的な方法により型式設定されたという点と、充分な資料に恵まれず、型式内容が不明瞭であったという点に、今日に至るまでの子母口式土器研究が混迷してきた大きな原因を見出すことができるであろう。

子母口式土器研究の上で多摩ニュータウンNo.269遺跡による安孫子昭二氏の業績（安孫子1967）は一つの革期となり、提示された四細分案に対し追認する見解と否定される見解とが示されてきた。後者としては鈴木克彦氏による堂場遺跡（鈴木 1972）の分析から得られた、田戸上層式から野島式への変遷觀が先駆的なものである。

また、清水柳遺跡の分析から得られた瀬川裕市郎氏の田戸上層式から野島式へという独自の変遷観（瀬川 1976, 1982, 1983）は子母口式土器を再検討する上で大きな業績を残したものである。瀬川氏の一連の見解を受けて、安孫子氏は多摩ニュータウンNo.269遺跡での四細分案を撤回し、改めて子母口式段階と茅山上層式以降の土器群について言及した（安孫子 1982）。両氏の論争はいまだに見解の一致をみないが、子母口式と茅山上層式以降の土器群との類似する文様要素に対する見解の相違に起因するものと思われる。

足場の弱い型式内容であった子母口式ではあるが、近年の資料増加によって、その問題点及び実態が、しだいに浮き彫りにされつつあるのが現状であろう。

では、明花向遺跡B区出土土器は編年的にどの辺に位置付けられるのであろうか。B区出土土器は文様施文手法、胎土、頬付き等から、ほぼ同一段階に位置付けられることが明らかとなった。これ等と同じ組成を持つ土器群は福島県竹ノ内遺跡で出土している。両者を比較した場合、類似点は多いが、貝殻腹縁文、刺突文、縦条体圧痕文が口縁部に集中して幅狭な口縁部文様帯を形成する点で若干異なり、地域性とも考えられるが、B区出土土器の方がやや後出的な感じを受ける。縦条体圧痕文が隆带上に施文される土器は雲入遺跡（埴 1966）、竹ノ内遺跡、多摩ニュータウンNo.269遺跡等でみられる。雲入遺跡例は併行沈線間に波状沈線を施文する点で田戸上層式に類似するが、大寺式系（興野 1970）の縦条体圧痕文とは異なる。本遺跡例は、隆帶が一本巡るだけの単純な文様構成と思われ、後出的な要素として考えられるであろう。

また、貝殻腹縁文土器は田戸上層式段階に比定されている帯世式（芳賀 1975）では併行沈線間に縱位に施文されているが、本遺跡例の場合口縁部に集約されているものが多い。竹ノ内遺跡では貝殻腹縁帶状施文によるモチーフを描出するものが大半を占めている。

以上の様な理由により本遺跡出土土器群は、東北南部地方の系統を強く引くもので、田戸上層式に比定される段階よりも若干後出的な様相を持つことが指摘出来よう。

しかし、本遺跡と同様な文様要素を持ち、細隆起線文と複合する土器群が高輪寺遺跡（青木 1979）、安塚遺跡（橋本 1980）、常陸伏見遺跡（小野 1980）、木の根遺跡（宮 1981）等で相次いで発見されている。これ等の土器群は縦条体圧痕文と複合される場合が多く、細隆起線文の出現によって、後続する野島式土器との関連が深いものである。本遺跡例と比較すると、高輪寺遺跡例は口唇部形態が異なり、条痕文が施文される点で相違する。各文様要素は系統的に存在するものの、施文幅は狭くなり、施文手法もやや難になる感じを受ける。大きな相違は細隆起線文の有無である。全体的な感じから高輪寺遺跡例等は本遺跡例より後出のものと判断される。本遺跡出土土器を介在することによって、高輪寺遺跡への変遷がスムーズに辿れるであろう。また、この段階の土器群は安孫子氏によって仮称「木の根A式」とされたものである。

東北南部地方の系統を引く土器群の変遷は明らかになりつつあるが、これ等の変遷と付合しない土器群も存在する。城ノ台貝塚（吉田 1955）では田戸上層式と子母口式とが層位的に検出されたが、子母口式とされたものは無文化傾向の強い土器群で、沈線、刺突文、隆線文、細隆起線文、貝殻腹縁による刻目等を特徴とするものである。田戸上層式からの系譜が辿れるものと思われるが、隔絶も少なからず存在する。城ノ台貝塚に存在する口縁に一本巡る隆線文は、細隆起線文出現への

橋渡し的なものと考えることも出来よう。この資料を介在させるとト伝遺跡（鈴木 1980）出土土器との関係が、ある程度系統的に解釈することが可能となろう。

以上、簡単ではあるが、子母口式土器を検討した結果、明花向遺跡B区出土土器は組成内容が比較的まとまっており、山内清男氏の提示した子母口式と類似する点もあるが、細隆起線文を伴なわない点で異なり、竹ノ内遺跡と系統性が強いこと等から子母口式土器の古い段階に位置付けておきたい。また、田戸上層式から野島式への変遷階梯には、明花向遺跡B区の様な土器群が存在することを確認しておきたい。子母口式の細分は資料不足の感があり、また、野島式との問題も多く、今後、細隆起線文の評価により異なってくると思われるが、現在少なくとも2段階以上の変遷を考えることが可能であろう。

子母口式から野島式への変遷について

野島式土器は広義の茅山式に含まれ、山内清男氏による織維土器の一連の研究の中で子母口式→茅山式→蓮田式という編年序列が組み立てられた。その後、赤星直忠氏による野島貝塚の調査（赤星 1948）、岡本勇氏による鵜ガ島台遺跡（岡本 1962）や吉井城山第一貝塚（岡本 1962）等の三浦半島を中心とする諸遺跡の層位学的な調査から、現行の野島式→鵜ガ島台式→茅山下層式→茅山上層式という茅山式四細分が確立されるに至っている。現在、子母口式と鵜ガ島台式との系譜関係から野島式は問題にされており、細分案も提示されている（瀬川 1982、金子 1982）。

野島式土器は野島貝塚の所見では細隆起線文と田戸式の平行沈線とが複合したものとして捉えられたが、細隆起線文の出自については触れられておらず、貝層直下の時期に発生し、貝層中、貝層直上にも存在することが指摘された。細隆起線文の出自については鈴木克彦氏（鈴木 1972）と熊谷常正氏（熊谷 1974）によって触れられている。鈴木氏は野島式をいくつかの型式学的な諸要素を包括するものと捉え、田戸上層式からの沈線文の系統と、他地域からの細隆起線文の系統が複合されて成立したものとした。他地域とは東北地方の櫻木I式を想定している。一方、熊谷常正氏は細隆起線文を関東地方において発生したものと捉え、各地に侵透力の強い要素であり東北地方へ流入したことを探し、鈴木氏とは逆の見解を示した。

現在の少ない資料からは判断されないが、早稻田貝塚（佐藤 1958）、蛇王洞洞穴（芹沢 1965）からは系統的に東北地方で細隆起線文が発生する必然的な要因はみあたらない。竹ノ内遺跡でも大寺・常世式系統に出自を求めるることは不自然である。関東地方の田戸上層式には城ノ台貝塚の様に刻みの施された隆帶が存在する。また、城ノ台貝塚の子母口式は口縁に1本の隆起線が巡り、刻みが施される。更にト伝遺跡A区F70から出土した土器は、細隆起線化した隆起線に刻みが施されている。1つの系統的な変遷として捉えられよう。しかし、ト伝例は全体的な様相から後出的な感じを受け、口唇部の形態は高輪寺遺跡段階と類似する。これ等の変化が系統的に位置付けられるものであるとすれば、細隆起線文の出自の一つを田戸上層式に求めることが可能となるであろう。

では、東北地方にみられる細隆起線文土器はどの様にして成立したのであろうか。現在のところ実証的な根拠はなく憶測の域を出ないが、東北地方田戸上層式から子母口式段階に存在する絡条体圧痕文の施される隆帶文が鍵を握るものと思われる。この隆帶文は田戸上層式系統の要素と大寺式系統の要素とが複合されて成立したものと推測され、先述した田戸上層式からの隆帶の変化と呼応

して細隆起線化する、1つの方向性を保有するものではなかろうか。しかし、現在のところ、この間の状況を物語る良好な資料は出土していない。そして、隆帶文の変遷のパラエティーが、子母口式における縦条体圧痕文のパラエティーの一部を示すものと思われる。若干肥厚する口縁部に押し潰す様な短かい縦条体圧痕を施文するものは高輪寺遺跡、常陸伏見遺跡等で出土している。これ等は細隆起線文と複合する場合が多い。隆帶変遷過程の最後の段階に、この種の土器が相当するものと想定しておきたい。竹ノ内遺跡では細隆起線のシャープさに欠ける土器に縦条体圧痕文の施文されるものが存在する。これは細隆起線文のみ施文される土器群より前出的な感じを受ける。

細隆起線文の出自の確定的な要素は依然として不明のままであるが、田戸上層式に何らかの脈絡が迫りそうである。そして、高輪寺遺跡段階では細隆起線文という要素は確立している。この段階にみられる細隆起線文のモチーフは口縁と水平に1~3本程度配されるものが特徴的である。この手法は田中谷戸遺跡（川崎 1976）や清水柳遺跡出土土器等にみられ、ほぼ同一段階に位置付けられると思われる。しかし、口唇部形態、施文具等に相違がみられ、時間差であるのか、地域差であるのかは不明である。現段階ではその土器群に至る系統差として理解しておきたい。また、この段階に確立した細隆起線文は、次の野島式へ移行するわけであるが、明花向遺跡C区からこの間の状況を示す土器が出土している。また、C区及びA区から野島式の変遷が捉えられる良好な資料が出土している。

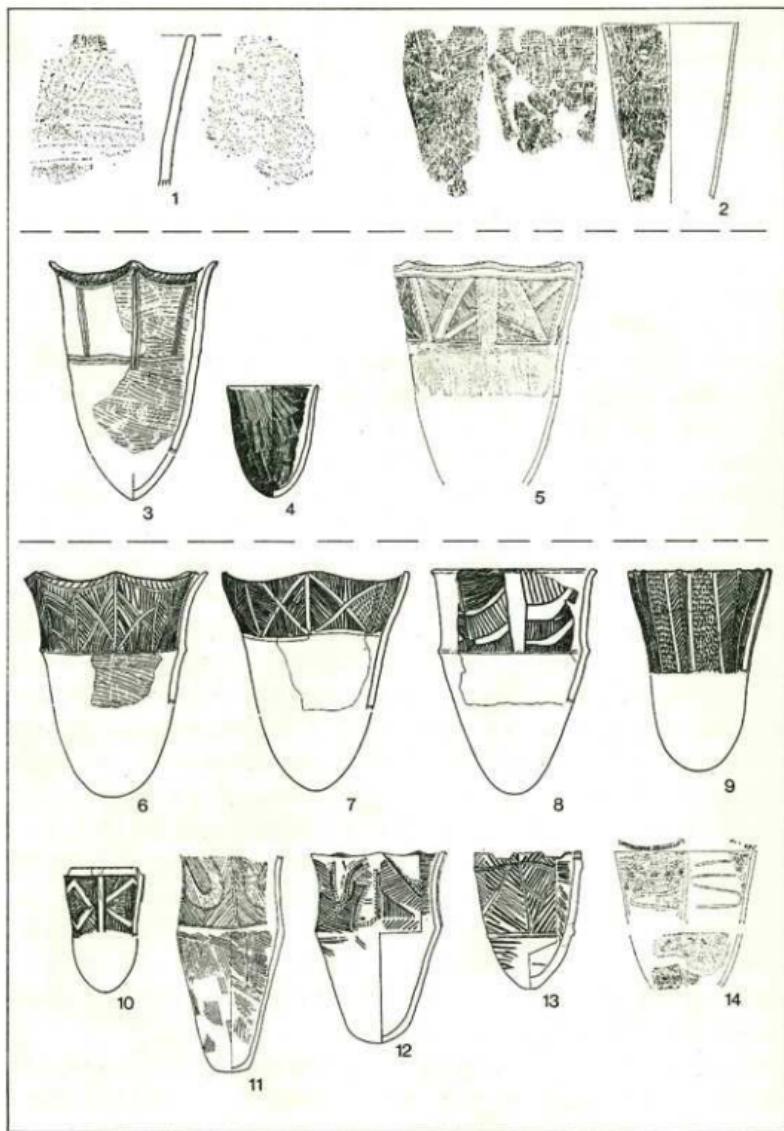
次に、子母口式から野島式への一つの変遷過程を本遺跡群出土土器を中心にして系統的に述べてみたい。他遺跡例を含めて、段階的に土器を並べたものが第267図である。説明の都合上、図中の番号を使用して説明を加えたい。また、野島式土器を説明する際に、文様帯を水平に割る手法を分帶手法、文様帯を縱に割る手法を分割手法、分割内を細かく割る手法を区画手法、区画内を埋める手法を充填手法と呼称し、それぞれを概念的に使い分けた。通常、文様が描出される順は、分帶→分割→区画→充填へという方向性を持つ。それぞれの手法に使用される文様要素の変化は、モチーフ自体の変化とともに、型式学的に前後段階との比較材料となるものである。

子母口式土器は明花向遺跡B区で出土しており、文様要素として貝殻腹縁文、刺突文、縦条体圧痕文が存在し、器面に擦痕が認められることが多い。これ等の諸要素は東北南部地方の系統が強く認められる。

高輪寺遺跡出土土器は明花向遺跡B区出土土器とほぼ同様の文様要素を持つが、型式学的に新しく位置付けられる。条痕文が顕著に施文されること、細隆起線文が文様要素に加わる等、新しい傾向が窺われる。

子母口式は無文化傾向が強く、文様が口縁部に集約されて幅狭の口縁部文様帯を持つことが特徴として看取できる。高輪寺段階になども細隆起線文は口縁部に集約されている。

ところが、明花向遺跡C区出土の第267図①は、文様帯の拡張がみられる。口縁に細隆起線が巡らされて、口縁部文様帯が区画され、貝殻腹縁文が充填される。また、胸部は併行する細隆起線で幾何学的なモチーフが描出されている。②は勢至久保遺跡（飯塚 1982）出土のもので文様構成上、①と同段階に位置付けられる。②は口唇部から細隆起線を垂下して、文様帯を分割するもので、細隆起線による幾何学的モチーフが描出される。口縁部には細隆起線によって口縁部文様帯が



1, 3, 4, 10 明花遺跡C区 2, 勢至久保遺跡 5, 卜伝遺跡
6~9 明花向遺跡A区 11, 下耕地遺跡 12, 13, 鳥込東遺跡 14, 大北遺跡

第267図 野島式土器段階変遷図

区画され、縦条体圧痕文が縦位に施文される。①、②にみられる施文具の相違は同一時期のバラエティーと思われる。②から明らかな様に、文様帶を拡張させるとともに、子母口式からの伝統要素を口縁部文様帶に残している。この段階が子母口式からの脱皮の時期である。高輪寺段階との時間差は今のところ不明であるが、型式学的には新出の様相を呈するものとして指摘して置きたい。また、この段階かまたは若干新しい段階に細隆起線文のみ施文される土器群が存在すると思われる。明花向遺跡C区では①とともに各種の細隆起線文土器が出土している。

①、②で形成された口縁部文様帶は明花向遺跡C区出土③に継承される。③は波状口縁を呈するが、波頂部と波底部から沈線を垂下して、文様帶を分割している。また、口縁に沿って弧状の口縁部文様帶が区画され、貝殻腹縁文が充填される。文様帶分割線が口縁部文様帶区画線から垂下されているため、口縁部区画の方が優先されている。文様帶は分割のみで細区画は行なわれない。細区画の前段階のものか、細区画の省略かは判断されないが、沈線の施文手法等から後者と推察される。この段階はト伝遺跡出土土器⑤の様な、沈線文と細隆起線文が複合する所謂野島式土器が出現する。沈線文は充填文要素として使用され、細隆起線からの変化と捉えられるが、他地域からの影響とも考えられる。また、⑤の口縁部には細隆起線が二本配され、口縁部無文帶が形成されており、③と異なるのは、部分的要素の系統差として考えられる。いずれにしても、前段階からの系統的要素を強く継承している。文様帶区画モチーフが多種存在することは言うまでもない。

次の段階で器形に変化が生じる。全ての土器がその例ではない。この段階の土器は明花向遺跡A区でまとまって出土している(⑥～⑨)。⑥は文様帶の分割、区画が③と類似するが、全て太沈線文が使用される点と胴部に段がみられる点で異なり、③より後出であると思われる。③は底部が尖底を呈するのに対し、⑥は丸底状になるものと思われる。この段階でも口縁部文様帶は区画され、沈線が充填されている。前段階の貝殻腹縁文が沈線文へと変化するが、やはりそこには系統的な脈絡が強く認められる。⑦、⑧は同一構造内から出土したもので、伴出関係は確実である。この段階におけるバラエティーを示している。⑦は段が存在せず、文様帶の分帶、分割、区画は同一の太沈線で行なわれる。充填文は細沈線が使用されるが、部分的に刺突文が使用される。刺突文は新しい要素であり、鶴ヶ島台式へと継承される要素である。⑦は区画の単純化、省略化が進んだものである。これに対して、⑧は細隆起線で分割、区画を行ない、充填要素として細隆起線と細沈線が使用されている。文様要素のみでは古い要素として受けとれるが、伴出資料や器形等から判断すると、新しい段階に古い要素が残存したと解するのが妥当であろう。⑧のモチーフ構成は竹ノ内遺跡出土の根木I式土器に系譜関係が求められるものである。棒状区画を構成せず、意匠文を構成する土器の系譜では細隆起線文の系統が残る。⑨～⑬はこの段階におけるモチーフの一部として示したものであるが、器形は必ずしも段や括れを持つものではない。

次の段階に、三里塚Na14遺跡(千葉北総公社 1971)、稻荷前マウンドF出土土器(中島 1978)等の文様帶が二段になる土器群の発生をみる。次型式である鶴ヶ島台式への過渡期的な土器群である(関野 1980)。鶴ヶ島台式への移行に際しても、野島式の文様要素のみならず、口縁部文様帶も無文帶として継承していく。

以上、田戸上層式以降野島式終末段階までの様相を、口縁部文様帶に主眼を置き、一つの系統性

の把握に務めた。子母口式から野島式への変遷は從来不明な点が多いとされてきたが、口縁部文様帯の変革を捉えることで、ある程度説明の付くものとなった。しかし、他地域との比較検討は充分に成されないままであり、今後の課題とし、後日まとめてみたい。かつて筆者は野島式土器について触れたことがあり（金子 1982）、野島式土器を大極的に三段階に区分して考えた。基本的な考え方は変わらないが、細部では異なる部分もある。各段階において新旧の要素として捉えられるものも存在するが、多くが破片であり、積極的に区分できる状況ではない。拙稿を参照していただければ、本文の主旨も大方理解していただけるものと思われる。内容に多々矛盾点もあると思われるが、先学諸氏の御叱正を請うと共に御教示を仰ぎたい。

（金子 直行）

引用・参考文献

- 青木 秀雄（1979）「高輪寺遺跡」久喜市埋蔵文化財調査報告書
青木 秀雄（1983）「前原遺跡」宮代町文化財調査報告書 第1集
青木 義勝（1982）「和田遺跡」
赤星 直忠（1948）「神奈川県野鳥貝塚」考古学雑刊 I
安孫子昭二（1967）「No.269 遺跡—縄文早期後半の土器」多摩ニュータウン遺跡調査報告 IV
安孫子昭二（1982）「子母口式土器の再検討」東京考古 I
飯塚 博和（1982）「半貝・倉之橋・勢至久保」
井口 直司（1982）「多間寺前遺跡 I」
井口 直司（1982）「下里本邑遺跡」
今井 宏（1984）「麗田遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第32集
今橋 浩一（1977）「中野木新山遺跡」
今村 啓爾（1983）「東京天文台構内遺跡」
植木 弘・金子 直行「金平遺跡」
江坂 輝也（1942）「福荷台文化の研究——東京市赤提町新井遺跡調査報告」古代文化 第13巻第8号
江森 正義・滝沢 浩（1968）「二ツ木向台遺跡第三類・市場坂遺跡第2群土器の考察」下総考古学 3
岡本 勇（1953）「平板貝塚」駿台史学 第3号
岡本 勇（1958）「横須賀市平根山遺跡」横須賀市立博物館研究報告（人文科学）第2号
岡本 勇（1960）「三浦市大浦山遺跡」横須賀市立博物館研究報告（人文科学）第4号
岡本 勇（1961）「三浦市鶴が島遺跡」横須賀市立博物館研究報告（人文科学）第5号
岡本 勇（1962）「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器」横須賀市立博物館研究報告（人文科学）第6号
岡本 孝之（1972）「福荷台文化の展開（一・二）」古代文化 第24巻第1号・第2号
岡本 東三（1980）「神宮寺・大川式押型文土器について」藤井祐介君追悼記念考古学論叢
岡谷・塙尻市教育委員会（1982）「概報・塙沢遺跡」
小川 和博（1981）「子母口式土器についての覚書(1)」なわ 第19号
小倉 均（1981）「大北遺跡・井沼方遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書 第15集
小野 真一（1979）「常陸伏見」
可見 通宏（1967）「No.269 遺跡—縄文時代早期前半の土器」多摩ニュータウン遺跡調査報告 IV
可見 通宏（1969）「押型文土器の変遷過程」考古学雑誌 第55巻2号
片岡 雄（1972）「神宮寺式土器の再検討」考古学ジャーナル No.72
片岡 雄（1982）「押型文土器」縄文文化の研究 3
神奈川県（1980）「神奈川県史資料編 20 考古資料」
金子 直行（1982）「野島式土器について——金平遺跡出土土器を中心として——」土曜考古 第6号

- 川崎 義雄 (1976) 「田中谷戸遺跡」
- 興野 義一 (1970) 「宮城県大寺遺跡出土の早期縄文土器」 古代文化 第22巻第11号
- 熊谷 常正 (1974) 「東北地方縄文早期後半の様相——条痕文系土器群の系譜——」 進光器第8号
- 甲野 勇・吉田 格 (1949) 「花輪台貝塚」 縄文図集1
- 小林 達雄 (1966) 「No.52遺跡・縄文早期前半に関する問題」 多摩ニュータウン遺跡調査報告 II
- 埼 玉 県 (1980) 「埼玉県史 資料編1 原始」
- 実川 順一 (1980) 「はけうえ」
- 榎原 正 (1977) 「金堀遺跡発掘調査概報」
- 十夢 駿武 (1972) 「東方第7遺跡」 浦北ニュータウン地域内文化財調査報告 III
- 白石 浩之 (1973) 「南横浜バイパスNo.4 遺跡」 神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告 5
- 白崎 高保 (1941) 「東京稻荷台先史遺跡——稻荷台式糸土器の研究(一)」 古代文化 第12巻第8号
- 庄司 克・細越 正行 (1974) 「松戸市二ツ木向台遺跡における早期縄文土器の研究」 史館 第3号
- 杉原 荘介・芹沢 長介 (1958) 「神奈川県夏島における早期初頭の貝塚」 明治大学文学部研究報告 第2冊
- 鈴木 克彦 (1972) 「堂場遺跡調査報告書」
- 鈴木 秀雄 (1980) 「ト伝」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第25集
- 鈴木道之助 (1977) 「東寺山遺跡・縄文時代」 京葉 II
- 瀬川裕市郎 (1976) 「清水柳遺跡の土器と石器」 沼津市歴史民俗資料館紀要 I
- 瀬川裕市郎 (1982) 「子母口式土器再考」 沼津市歴史民俗資料館紀要 6
- 瀬川裕市郎 (1982) 「条痕文土器」 縄文文化の研究 3
- 瀬川裕市郎 (1983) 「野島式土器に関する2~3の覚え書」 沼津市歴史民俗資料館紀要 7
- 関野 哲夫 (1980) 「鶴ガ島台式土器細分への覚書」 古代探査
- 芹沢 長介 (1954) 「関東及び中部地方における無文土器文化の終末と縄文文化の発生に関する予察」 繫合史学 第4号
- 芹沢 長介 (1956) 「神奈川県大丸遺跡の研究」 繫合史学 第7号
- 芹沢 長介・林 謙作 (1965) 「岩手県蛇王洞洞穴」 石器時代 7
- 芹沢 長介・吉田 格 (1967) 「埼玉県横立岩陰遺跡」 石器時代 8
- 海沢 浩 (1968) 「埼玉県市場板遺跡の早期縄文式土器について」 下総考古学 3
- 竹島 国基 (1958) 「福島県双葉郡大平遺跡略報」 石器時代 5
- 谷井 寛 (1976) 「鶴ヶ丘」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第8集
- 千葉北総社 (1971) 「No.14遺跡」 三里塚
- 千葉 市 (1979) 「千葉市史 資料編1」
- 土肥 義夫 (1974) 「秋川市二宮神社境内の遺跡」 秋川市埋蔵文化財調査報告書 第1集
- 戸沢 充則 (1955) 「縄沢押型文遺跡」 石器時代 2
- 戸沢 充則 (1955) 「押型文土器編年研究素描」 中部高地の考古学
- 中島 宏 (1978) 「入間郡日高町出土の早期縄文土器」 埼玉考古 第18号
- 中島 宏 (1981) 「深水谷・安光寺・北坂」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第1集
- 中西 克 (1978) 「貫井」 小金井市文化財調査報告書 5
- 西川 博孝 (1980) 「三戸式土器の研究」 古代探査
- 野口 行雄 (1983) 「新東京国際空港 No.14遺跡」
- 野口 義勝 (1951) 「東京都世田谷区・千歳遺跡調査報告」 上代文化 第21輯
- 芳賀 英一 (1975) 「常世遺跡の早期縄文式土器に就いて」 進光器 第9号
- 横本 勉 (1980) 「安塚遺跡」 鹿島線関係遺跡発掘調査報告書
- 服部 敬史・深田 劳行 (1974) 「春日台・下耕地遺跡」
- 埼 静夫 (1976) 「雲入遺跡」 作新学院考古学資料室調査報告 3
- 早川 泉 (1983) 「深大寺池ノ上遺跡」 調布市埋蔵文化財調査報告 2
- 原川 雄二 (1982) 「多摩ニュータウンNo.205遺跡」 東京都埋蔵文化財センター調査報告 第2集

- 原田 昌幸 (1983)「藤の台遺跡II」
- 原田 昌幸 (1983)「撫糸文期の堅穴佐居跡」 土曜考古 第7号
- 益間 孝次 (1971)「霞訪山遺跡」 埼玉県遺跡調査報告 第8集
- 毒島 正明 (1983)「子母口式土器研究の検討(上)」 土曜考古 第7号
- 松沢 亜生 (1957)「細久保遺跡の押型文土器」 石器時代 4
- 宮 重行 (1981)「木の根」
- 宮崎 朝雄 (1981)「甘柏山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第30集
- 宮崎 朝雄 (1981)「撫糸文系土器群の終末と無文土器群」 土曜考古 第3号
- 矢島 清作 (1942)「東京都杉並区井草の石器時代の遺跡」 古代文化 第13巻第9号
- 安岡 路洋 (1965)「大宮市指扇井戸尻に於ける縄文早期資料」 埼玉考古 第3号
- 安岡 路洋 (1966)「浦和市大牧梅所発見の縄文早期資料」 埼玉考古 第4号
- 安岡 路洋・三友園五郎 (1966)「稻荷原」
- 山内 清男 (1930)「関東北に於ける繊維土器・追加第3」 史前学雑誌 第3巻第3号
- 山内 清男 (1941)「日本先史土器図譜」 第7輯
- 横山 功 (1974)「飯重」
- 吉田 格 (1941)「埼玉県大原遺跡調査報告」 古代文化 第12巻第2号
- 吉田 格 (1955)「千葉県城ノ台貝塚」 石器時代 1

3. 弥生時代

本遺跡群における弥生時代の遺構と遺物は、明花向遺跡A区及び同B区にその検出は限られている。既述のように、明花向遺跡は沖積平野を見下ろす南突した舌状台地上に位置し、中央の小谷を挟んで西側がA区、東側がB区である。A区では宮ノ台式期の住居跡1軒、方形周溝墓2基、V字溝1条が検出され、V字溝の覆土中からは弥生町式土器が伴出している。B区では宮ノ台式期の住居跡が6軒、方形周溝墓1基、弥生町式期の住居跡3軒が検出されており、両時期の住居跡は東と西に各々の集落を形成している。ここでは、これらの集落跡とこれを構成する各遺構、及び出土遺物についてまとめてこととする。

(1) 住居跡

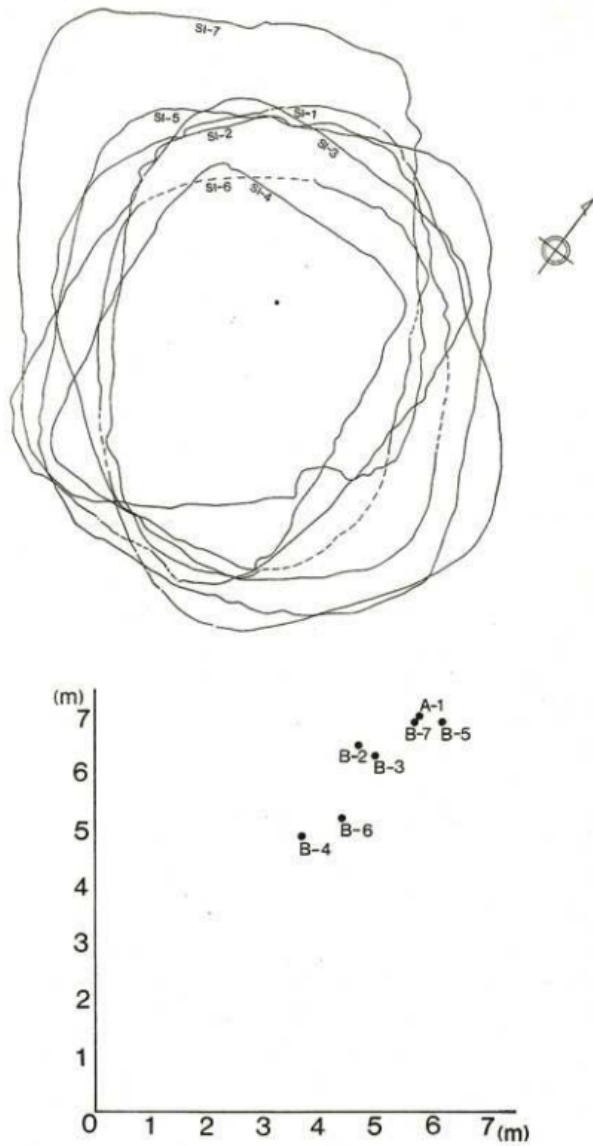
宮ノ台式期の住居跡はA・B両区で7軒である。その大半には4個の主柱穴、壁溝・貯蔵穴・炉跡の各施設が見い出され、これらが整然と配置された姿を窺うことができる。以下では、各住居跡の説明に従い、それぞれの特徴について概観したい。

住居跡の平面形態はすべて隅丸長方形を基本としているが、概ね以下の三者に分けることができる。即ち、四辺の張りが強く小判形を呈するもの（B区S I-2）、四辺の張りが弱く隅部の丸味が大きいもの（A区S I-1、B区S I-2・3・6・7）、四辺が直線的で隅部の丸味の小さいもの（B区S I-4）である。住居跡は主軸線を以ってほぼ左右対象形となるが、B区S I-4・7は不対象で台形状を呈している。

規範的にはB区S I-2・3が平均（長軸6.31m、短軸5.07m、面積29.6m²）に近い数値を示し、A区S I-1とB区S I-5・7がこれよりやや大形、B区S I-4・6が小形となるようである。面積では最大のB区S I-5が最小の同区S I-4の約2.25倍となるものの、特に傑出して大形のものは認められない。但し、B区の集落跡内ではS I-5が中央部に位置していることを指摘できる。

主軸方向はほぼ北を指すもの（B区S I-3・4）と北西に偏したもの（A区S I-1、B区S I-2・5・6・7）に大別でき、台地の南辺に対して直交する状態を窺える。

床はB区S I-2が貼床式である以外はすべて直床式である。S I-2の構築過程は同項に述べたとおりであるが、ロームと黒色土の混合单一土層となり、複次の貼付は行われていない。貼床の枚数を除けば、東京都杉並区方南峰遺跡（重住・菅田 1978）Y-1号住居に示された構築過程一柱穴を含めた住居の荒掘り→主柱を立てて根固め→居住面としての貼床→と同様の手順となる。直床式の住居跡はその後の断ち割りによっても荒掘り面は認められず、貯蔵穴の突堤と共に直接整面されたものと思われる。いずれも硬く踏みしめられており、炉跡周辺は特に著しい傾向を示している。このうち、B区S I-6のみはいわば有段の床面となり、主柱穴間を周溝によって区分している。精査の結果は住居の拡張や重複に対して否定的であり、あくまで床面の一形態として捉えられるべきものである。床面壁側の一部から全体を高めるものは、從来「ベット状遺構」・「テラス状遺構」等と呼称され、弥生時代後期から末期の住居跡に報告例が多い。しかし、本跡は周溝を巡ら



第268図 宮ノ台式期住跡比較

せているうえ、床面の内外での高低差も極めて少ない。このため、直ちにこれを同系列視することはやや危険と言えよう。

P₁～P₄の主柱穴はすべての住居跡で検出されている。平面形態は円形乃至楕円形を呈し、ほぼ住居跡の対角線上に長方形の配置となる。B区S I-7以外は宮本長次郎氏の指摘のように、長方形の両短辺から壁面までの距離は長辺からのそれよりも長くなる（宮本 1979）。B区S I-2のものは住居跡の規模に比して大形で、底面も平坦となっている。柱穴内の覆土はロームを主体とした故意の充填土であり、かなり強く固められている。その多くには柱痕が認められ、土層断面で確認できた幅は15～20cm程度である。断面の位置にもよるが、支柱の太さもこれに近い数値のものであったと思われ、柱穴はその3～5倍の規模を有することとなる。尚、B区S I-4・6にはP₁に重複が見られたが、切断するものがより深く掘り込まれている。

炉跡は主柱穴P₁とP₂の中間やや内側に営まれ、B区S I-7のみはP₂・P₃間に位置している。地床炉以外は認められず、楕円形で掘り込みの浅いものが多い。B区S I-2には2基が存在し、同区S I-3・4は掘り込みが深いうえ灰層を挟んで2～3枚の炉床を有する。また、B区S I-3・5・6では炉跡の南側に小ピットが検出されているが、これが炉跡に関連するものか否かは不明である。

貯蔵穴はA区S I-1とB区S I-6で確認できなかったものの、他は総じて突堤を設けている。突堤はS I-2とS I-4（後述）がロームの貼付、それ以外は床面構築と同時に削り出されている。貯蔵穴を巡る形態は台形となるもの（S I-2・7）、方形となるもの（S I-5）、半円形となるもの（S I-3）、半楕円形となるもの（S I-4）が見られる。規模は幅約28～58cm、高さ約4～7cmを測り、周溝は幅約10～12cm、深さ約3cmである。また、貯蔵穴は円形のもの（S I-3）と楕円形のもの（S I-5・7）、及び方形のもの（S I-2・4）に大別される。規模は長径約56～114cm、短径約50～82cm、深さ約22～39cmの範囲内であるが、S I-5・7のものは突堤を含めてやや大形となる。位置は住居跡南壁の東側にあたり、概ね主軸線を突堤の西端として壁溝に取り付いている。この例外はS I-7で、住居跡南西のまさに隅部に設けられているほか、壁溝が突堤部で途切れている。底面は大半で平坦となっているが、S I-4のみは丸底状を呈している。尚、遺物の出土した貯蔵穴は少なく、S I-5底面より始刃石斧（第128図16）、S I-7の同じく底面より壺形土器片（第135図1の一部）が検出されたにすぎない。

以上のように、各施設は住居跡内における配置に齊一性を見い出すことが可能かと思われる。但し、常にこれを否定するかのように、例外を提供するのはB区S I-7である。同跡に他の住居跡との比較を通じて指摘しうる点は、その主軸線を短軸に置き換えたならば、各施設は他の住居跡とほぼ同様の配置を示すという事実である。この場合に考えられるS I-7の在り方は、住居の重複、あるいは拡張であろう。両者の認められなかったことは既に述べたとおり、土層や床面等の観察からはいずれの状態も否定的であった。特に主柱穴については、床面除去によってもその推定される位置周辺での検出はなく、その痕跡すら窺うことはできなかった。このため、S I-7は他の住居跡との共通性を有しながらも、より特殊性の強い住居跡として捉えておきたい。

次に、B区の集落構成を考えるうえで重要と思われる、S I-3とS I-4の重複関係について

若干ふれておきたい。両者の関係は各住居跡の説明で述べたが、その要点は以下のようなになる。

- ① S I-4 が後出の住居跡である。
- ② S I-3 の覆土は非常に良くしまっており、堆積も単純である。
- ③ S I-3 の壁溝と貯藏穴のうち、S I-4 の床面にあたる部分にはロームが詰められており、強く踏みしめられている。
- ④ S I-3 の炉跡、及び主柱穴 P₃ の上面は強く踏み固められている。

このうち、①については土層断面により明確である。②は S I-4 構築に際しての埋めもどしによるものではないかと指摘したが、ある程度の自然埋没は考慮しなければならない。これは貯藏穴の最上層を除いた覆土全体が黒色土からなることによる。しかし、S I-3 が既に完全埋没した住居跡であるならば、③という行為は④の事実が存在することから見てやや不自然といえよう。偶然の一一致としてしまえばそれまでであるが、主軸方向や床面レベルの同一性を加味して考えるならば、S I-4 の構築は S I-3 の存在を充分に意識した内で行われたものといえる。床面についてはこれをそのまま、あるいはさらう程度の状態で使用したことが推定される。こうした場合問題となるのは、S I-4 が S I-3 の「縮少住居」であるのかという点である。完全埋没後の構築については否定的であったが、S I-3 に上屋が存在する時点で住居が縮少を意図された場合、その主柱処理は大きな課題となるはずである。S I-3 の P₁~P₄ にはいずれも柱痕が認められるため、主柱を抜き取ることはなかったと判断される。石井寛氏は「折本西原遺跡」(石井他 1980) の報文中で主柱穴の重複における旧住居の柱穴覆土を三つに分け、各々の場合について考察を加えている。その概要は、i ロームによって充填され、埋めもどされたもの。柱の抜き取り。ii 上部数cmがロームによる貼床で、それ以外はしまりの全くないローム質の褐色土。貼り床下には柱痕があり、腐り易い根元から折ったもの。iii 上部に數cmの貼床があり、以下が黒褐色土に変化する。貼床以前に堆積、または埋めもどし。である。B区 S I-3 と S I-4 に主柱穴の重複はなく、柱穴覆土上部に貼床も見られない。但し、両住居跡の重複関係における可能性として、上記iiの場合を指摘することはできよう。

このように見るならば S I-4 を S I-3 の縮少住居としてよさそうであるが、ここにおいてもいくつかの疑問が残る。それは先に示した S I-3 貯藏穴の覆土の堆積状態と、同跡北東隅部より菱形土器 1 個体が検出されているという点である。前者はかなり良くしまってはいるが、故意の埋めもどしとは確定しがたく、後者についても出土遺物は少ないものの、埋めもどしに際しては持ち出すことが可能である。貯藏穴覆土が自然埋没であり、菱形土器もこれに伴うものであるならば、S I-4 を完全な縮少住居として認めるることはできない。以上長々と述べてきたが、このことが検証されない限り、両者を住居の縮少と断定するにはや躊躇せざるをえない。ここではあくまでもその可能性を示すに止どめ、B区の集落が住居の重複を見せながらも、これがほぼ一定期間内に営まれたものであることに主眼を置きたい。

弥生町式期の住居跡は B区に 3 軒が検出されている。このうち、S I-8 と S I-10 は削平のために全体の形状を大きく損い、平面形態等は不明な点が多い。S I-9 のみは隅丸方形を呈する住居跡と認められるが、床面の状態や炉跡が検出されていないこと、遺物がほとんど見られないこと

など、他住居跡に対してかなり異った様相を示している。極端な言い方をすれば、S I-8やS I-10に感じられる「生活喰」が欠落しているということである。「居住空間」であることを「住居」の最小公約と規定できるならば、炉を設営しないという事実は、この図式から逸脱した解答を引きだす大きな要因となろう。集落という共同生活領域におけるこのような遺構の存在は、恒久的居住を目的としない一種の共同利用の場として捉えられないだろうか。しかしその反面、本跡が構築途上の遺構ではないかという疑問が払い切れないことも事実である。

住居跡内の各施設については、削平のために住居跡自体の形状が不明確であるため、その位置等についての特徴を述べることはやや困難である。ここでは、S I-8とS I-10に炉跡が存在し、いずれの住居跡からも明確な柱穴は検出されなかったことを指摘するに止どめたい。

(2) 方形周溝墓

方形周溝墓はA・B両区で3基が確認されている。A区の2基は台地の削平や掘削のために明確としない点があるが、いずれも4本の独立した溝で構成され、4隅はブリッジ状となっている。このような形態は神奈川県歳勝土遺跡（坂本・小宮 1975）や菊間遺跡（中村他 1974）をはじめ、東京都伊皿子貝塚遺跡（清水他 1981）、同山王遺跡（野本他 1981）等々に見られ、宮ノ台式期においては普遍的な形態であるといえる。

規模はA区SZ-1が13.5×15.0mと大きく、同区SZ-2は8.8×8.6m程と小形になる。B区SZ-1はその中間で、10.0×9.6mという数値を示している。

A区の2基はほぼ同一の主軸方向をとり、重複することなく南北に配置されている。このような状態については、小宮恒雄氏の「歳勝土遺跡」報文中に窺うことができる。以下に引用すると、「これらは、築造に際して同一方向を踏襲するような何んらかの基準があったことによるとみられる。……（中略）……そしてこうした基準によって配列された方形周溝墓は、相互に極めて接近しながらも、一部に周溝が切り合ったものがある他には大きく重複した例がなく、そのことは、これらがかなり限られた期間内に相次いで作られたことを示している。」という一文である。歳勝土遺跡は26基の方形周溝墓が大規模な墓域を形成しており、わずか2基が検出されたにすぎない明花向遺跡A区に対し、直ちに上説を適合させることはいさか早急にすぎるかもしれない。しかし、これを可能性として考えた場合には、掘削された台地の東と南にはさらに数基が存在したことを推定できよう。

各溝はA区の2基がほぼ平坦な溝底となるが、B区SZ-1は緩い円弧を描いている。このようにいわば弓状弧を示す例としては、山王遺跡の方形周溝墓を挙げることができる。また、溝中の土壤状の掘り込みについても、既に歳勝土遺跡に指摘されているとおりである。B区SZ-1北溝には3基のそれが認められ、内2基は溝長軸に添て営まれている。一番新しいK₁は溝がわずかに埋没した時点で掘り込まれており、途中で溝をさらうという処置が施されなかつたとすれば、3基は短期間にうちに設営されたことになる。さらに、新たに掘り込まれたものは各々が既設のものを切断する状態にあり、周溝々底における掘り込みの性格を考えるうえで注目される事例といえよう。

遺物は出土量が少ないうえ、A区SZ-1の壺形土器以外はすべて少片である。その壺形土器の

出土状態は既に述べたが、土壤状の掘り込み脇より検出されていることは興味深い。しかし、土器は横転して溝底よりわずかに浮いており、掘り込みを意識して脇に置かれたものか、上部より転落したものかは判然としない。いずれにしても、A区S Z-1に供獻された土器である蓋然性は高いといえよう。多くの遺跡の方形周溝墓で検出されるこの種の土器は、圧倒的に壺形土器がその主体をなしており、打ち欠かれる部位は底部あるいは胴部が大半である。本跡出土の壺形土器はそのいずれにも加工された痕跡が見られず、むしろ頭部以上を欠失している。歲勝土遺跡や伊皿子貝塚遺跡においてもこのような例は見られ、打ち欠くという「行為」の対象として頭部以上が選定される可能性は否定できない。

(3) 溝

A区においてわずかに9.5m程が遺存していたにすぎないが、断面はV字形を呈しており、これが台地先端部を区画するように延びるものと思われる。このことを含め、A区における該期他遺構の存在からは、本跡が集落を取り囲む環濠（あるいは条濠）である可能性が高いといえる。環濠集落は県内だけでも、和光市新倉牛王山遺跡（鈴木 1981）、岩槻市木曾良遺跡（庄野・星間・市川 1974）、与野市中里前原遺跡（宮内・秦野・仲野 1980）、浦和市馬場北遺跡（青木・高山・小倉 1983）、美里村神明ケ谷戸遺跡（坂本 1980）、熊谷市池上遺跡（中島 1982）が挙げられる。

本跡は台地掘削によりそのごく一部が検出されたのみであるが、環濠とすればその内側にかなり大規模な集落が営まれていたことは想像に難くない。

覆土は自然堆積を示しており、遺物は宮ノ台式と弥生町式の土器が共伴している。溝底部にも両時期のものが見られ、時期に従った堆積過程は認められなかった。

(4) 出土遺物

宮ノ台式の土器は大半が壺形土器と甕形土器である。これに高环形土器がわずかに加わるが、それらはいずれもA区より出土している。

甕形土器

甕形土器はかなりバラエティーに富んでいるが、これを口唇部の形態と器面調整より見ると、概ね以下のように分けられる。

第Ⅰ類は口唇部に指頭押捺を施し、器表面に刷毛目を残すものである。器面調整に関してはさらにこれを三分することができる。一つは器表面が条痕状の粗く深い刷毛目で覆われ、裏面に施される範囲も広いものである。B区S I-5の4（第126図）と5（第127図）がこれにあたる。二つ目は刷毛目が浅くヘラ撫で状となり、裏面にはそれが残らないものである。A区S I-1の9（第50図）とB区S I-3の2（第119図）がこれにあたる。いま一つは前二者の中間的なもので、B区S I-5の5（第127図）が該当する。これらのうち、S I-5の4は頭部のくびれが強く、同じく7は胴上半部が直立している。胴最大径は全体的には中位にあるが、S I-1の9はやや下ぶくれの器体となっている。

第Ⅱ類は口唇部に刻み目を有し、器面に刷毛目を残すものである。第Ⅰ類と同様、器面調整で二

つに分けられる。一つは条痕状の粗く深い刷毛目が器表面を覆い、裏面は頭部以上に施されているものである。B区SI-5の6・8(第127図)がこれにあたる。もう一つは浅い刷毛目調整となり、裏面はヘラ撫で状となるものである。B区SI-4の14(第120図)がこれに該当する。刻み目はいずれも刷毛状工具によっており、SI-4の14は他に比してその間隔が広く、かつ浅いものとなっている。また、SI-5の8は口唇平坦部に刷毛目が認められ、同6は胸部が球形を呈する。

第Ⅱ類は口唇部に刻み目状の工具押捺が施され、器面に刷毛目を残す小形の壺形土器である。B区SI-4の6のみが挙げられるにすぎないが、器肉は厚く、刷毛目がかなり細かい。口唇部の押捺は棒状工具によっており、その側面を器表面に押しつけている。このような施文例は東京都利島ヶッケイ山遺跡(大塚 1959)出土の須和田式土器(報告者による)に多く見ることができる。

第Ⅲ類は裏面において二重の口縁となり、器面は撫で調整となるものである。口唇部は斜めに成形されるが、ここへの施文の有無で二つに大別できる。一つは指頭押捺が加えられるもので、B区SI-2の10(第112図)と17(第113図)、及び同区グリッド出土の11・13(第149図)がこの例である。いま一つは押捺の施されないもので、同じくSI-2の18(第113図)、SI-7の5(第135図)、グリッドの14(第149図)がこれにあたる。いずれも粘土帯を貼付したもので、明らかに折り返しの認められるものは存在しない。貼付された粘土帯の上、またはその下位器面には断続する併行沈線文の描かれるものが多く、うちSI-7の5は横位の羽状沈線文が器体を巡っている。複合口縁で羽状文を有する例としては、埼玉県戸塚上台遺跡の第1号住居跡(柿沼 1981)、千葉県大庭遺跡Y-44・46号址(三森・阪田他 1974)のものが挙げられる。

第Ⅳ類は口唇部が角ばった斜めの成形となり、ここに刷毛目が良く残るものである。A区SI-1の8・10・11(第50図)、B区SI-4の15(第120図)と19(第121図)がこれに該当する。このうち、SI-1の8は台付の壺形土器で、器面は表裏ともに刷毛目で覆われている。刷毛目はB区のものが比較的良く残り、A区SI-1の11はヘラ撫で状、同10は磨耗のため不明瞭である。また、10は色調や胎土が他のものに比して異っており、併行沈線が器体を巡るという点を含めてその存在が注目される。

第Ⅴ類は口唇部に繩文が施され、器表面に文様を有するものである。B区SI-2の9(第112図)は擬流文とコの字状文が描かれ、同跡より伴出している壺形土器(第111図1)と施文を含めて色調・胎土・焼成が非常に良く似ている。このため、両者を用途意識における一つの土器組成として捉えることは比較的容易である。器形的には他の壺形土器が器高を上回る口径を有さないのに対し、9はこれを大きく上回っている。B区SI-4の20(第121図)はコの字重ね文とボタン状貼付文が施されるものである。また、同区SI-6の1(第131図)は口縁が受口状を呈し、簾状文と波状文、及び波状文を切断する縦位の併行沈線が引かれるものである。両者はともに長野県で栗林式、百瀬式、北原式等と称される土器の範疇に含まれるもので、前者は秩父市篠遺跡(埼玉考古学会 1976)や浦和市大北遺跡第2号住居跡(青木他 1983)に検出例が見られ、後者は寄居町用土平遺跡(埼玉県 1982)までの分布が知られている。

出土した壺形土器は大半が長頸のものであり、B区S I-2よりわずかに有孔短頸の広口壺形土器（第112図8）、長頸小形の壺形土器（第111図3）が見られる。器高はB区S I-5の1（第126図）が65.5cm程とかなり大きく、これとA区S I-1の器合に転用されたと思われるもの（第49図5）も大形の壺形土器である。他は器高25.8~39.8cm程であり、胴最大径は中位にあるものが多い。

口縁部の形態は、A区S I-1の1（第49図）やB区S I-3の8（第120図）のように、緩やかに外反して口唇部が丸味を帯びるもの。B区S I-3の9（第120図）と同区グリッド3の（第149図）に見られるように、大きく広がってラッパ状を呈するもの。B区S I-2の1（第111図）やS I-5の1（第126図）、S I-7の2（第135図）のように、ほぼ直立して受口状となるもの。A区S I-1の5（第49図）、同SD-1の8（第60図）、B区S I-2の2（第111図）のように、複合口縁となるもの。が各々認められる。

胴部の形態は一様でないが、器壁が緩やかな曲線を描いて立ち上がり、球形を呈するものが多いといえる。この他、B区S I-2の4（第111図）、S I-4の3・4（第119図）、S I-5の1のように器壁が直線的に広がり、胴最大径部で強く内屈して潰れた感じとなるものがある。このうち、前二者は胴最大径がやや上位にある。

文様帶は口縁部のほか、頸部から胴部にかけて見られる。施文は繩文・平行沈線文・刺突列点文に限られるが、これらはかなり多様な組み合わせとなっている。

刺突列点文のみが頸部を巡る例としては、A区S I-1の1、B区S I-3の8等が挙げられ、口縁部形態では1番目のものにあたる。いずれも刷毛状・棒状両工具により、器面に対して斜めに押し引くようにして施文される。

刺突列点文に繩文と箆描文の加わるものとしては、B区S I-5の9~14（第128図）とS I-7の1（第135図）がこれに該当する。S I-5の例は有段口縁の長頸壺形土器ではないかと思われ、刺突列点文と重四角文（？）が繩文帶を区画している。S I-7の例は重圓文が2段4単位描かれ、これを刺突列点文が区画する形となる。前者は須和田式土器の特徴を備え、後者は足洗式・南御山式等の東関東から南東北地方の土器に類例を求めるべきか。特に後者は胎土の組成がかなり異っており（後章参照）、あるいは在地で製作されたものではないかもしれない。

繩文と箆描文の組み合わされるもののうち、B区S I-3の9と同区グリッドの3は口縁部形態の第2番目にあたり、口唇部と頸部に繩文が施される。頸部の繩文帶には平行沈線文が巡っており、群馬県から埼玉県北部に分布する竜見町式土器に近似している。B区S I-2の12（第113図）は繩文帶を挟んで平行沈線文・複線縦齒文・横位対方向の羽状文・箆描のコの字状文が各々器体を巡るものである。羽状文は主に変形土器に施され、壺形土器では他遺跡（折本西原遺跡・大庭遺跡・菊間遺跡等）においてもわずかに散見するにすぎない。A区S Z-1の1（第54図）もこの部類に含まれるが、繩文はごく部分的な施文となり、沈線も規則的ではない。前記の土器が器体を巡る横位の施文であるのに対し、これは縱位に意識されている。

箆描文を主体とするものは、A区S I-1の2（第49図）、SD-1の1（第59図）、B区S I-2の1、S I-7の9~11（第136図）が挙げられる。S I-1の例は流水文とコンパス文が同一

工具によって表出される。宮ノ台式土器の中に明らかに流水文といえる文様を有するものは見られず、本資料も色調や胎土が伴出した壺形土器とは異っており、他地域からもたらされた可能性がある。流水文の祖源は畿内地方に求められようが、施文に回転台の使用は認められず、文様も決して流麗なとは形容しがたい。横描文の多様さの中において、これを流水文の系譜として捉えられるかという点についてはやや資料不足の感が否めず、今後の研究課題としたい。SD-1の1も同じく色調・胎土等が異っており、器形も図上復元であるがやや異質である。SI-7の10・11は同一個体で、密に引かれた併行沈線を2本1単位の断続する縦位の沈線が切断している。このような施文は瓜郷式に特徴的な手法であり、これ以降も三河地方の土器に多く見られる。埼玉県では岩槻市平林寺遺跡（塙野他 1972）第14号土壇出土のものに類似を求められるが、縦位の沈線は器体を分割し、横位のものはその間に充填される形となっている。SI-2の1は直立する口縁部と頭部下半に擬流水文が施されるもので、先述のように伴出の壺形土器（9）とセット関係にあるものと考えられる。擬流水文について見れば、1が3段4単位で工具は5本歯、9は3段5単位で6本歯の工具、となっているものの、その製作は同一人物ではないかと思われる程に特徴が似ている。

擬流水文と繩文の組み合わされたものとしては、B区SI-7の6～8（第136図）が挙げられる。現存6段の擬流水文の下部に2段の繩文LRが施文され、さらにこれより縦位に施された繩文は範描沈線によって区画される。このように擬流水文と舌状に垂下した繩文帯を有する例は、菊間遺跡（中村・斎木 1974）第53号住居跡出土のものに見られる。大庭遺跡にはこの沈線で区画された舌状繩文帯のみが施される壺形土器も認められ（Y-62号址）、擬流水文との組み合わせには興味が持たれる。

弥生町式土器はA・B両区で検出されているが、ここでは良好な出土状態を示すB区SI-10出土土器について若干ふれておく。SI-10からは壺形土器5（うち1個体は鉢に転用）、壺形土器5（うち3個体は合付、1個体は台部のみ）、高坏形土器1が検出されている。全体は弥生町式の良好なセットとして捉えられるが、ここで特に問題となることは、10の頭部から口縁部に輪積み成形痕を残す壺形土器の存在である。胎土分析にも表われているように、他のものと胎土組成が大きく異っており、他地域から搬入された可能性は高いと考えられる。この種の土器は久ヶ原式の範疇に含まれるものであるが、近年は神奈川県新羽大竹遺跡（白石・岡本他 1980）等で指摘されるように、弥生町式土器に伴って検出される場合がしばしばある。本跡の場合もこの一例と言えそうであり、弥生町式の典型的な壺形土器との共伴は大いに興味が持たれる。大宮台地において、輪積み成形痕を表出する壺形土器（久ヶ原式）の報告は本例が最初であると思われるが、荒川自然堤防上の戸田市南原遺跡からもこれの口縁部が出土している（高橋一夫より提示、筆者実見）。現在のところ、この土器を久ヶ原式以外の型式に求めるることはできないため、「新羽大竹遺跡」で岡本孝之氏が述べるように、共伴する弥生町式土器と時期的には同一と考えざるをえない。但し、大宮台地においては久ヶ原式土器と呼ばれるもの自体が明確でなく、両者が完全に併行関係にあるとは明言しがたい。また、両者を一型式視することも不可能と思われ、本例はあくまでも久ヶ原の系譜で捉えられる客体的な土器、として認識しておきたい。

最後にグリッド出土の銅鏡について、その類例を挙げておく。既述のように文様の検討や科学的な分析を行っていないため、時期等については不明確な点が多いことをおことわりしておきたい。類例は静岡県賀茂郡日詰遺跡（鈴木他 1978）東北地点探集の小形仿製鏡である。これは内区と外区に分かれているが、このうちの内区が本遺跡出土のものと非常に良く似ている。日詰遺跡のものは古墳時代の祭祀跡との関連が指摘されているが、本遺跡B区には祭祀はおろか古墳時代の造構すら検出されていない。

(5) 宮ノ台式期の集落跡

ここでは明花向遺跡A・B区に検出された宮ノ台式期の各集落跡について、その構成や関連について整理したい。

出土土器は宮ノ台式の範疇に含まれるもののが主体であり、B区の集落跡より出土したものが古い様相を示すようである。その組成は多様であり、中部高地から北関東地方、東関東から南東北地方に系譜を求める土器が存在する。宮ノ台式土器の細分が検討段階にある現在、両集落跡間の時間的関連は明確にしきれない。但し、B区の集落跡が継続して営まれた様子は見られず、ほぼ単一期間のみで廃絶したものと思われる。S I-2をはじめとする豊富な遺物の遺存状態や、S I-4及びS I-5に検出された特殊な焼土の在り方は、B区に起居した人々がA区へ移動したというような直接的関係にやや疑問を抱かせる。壁に添って厚く堆積する「焼土帯」については前掲「中里前原遺跡」報文中にまとめられており、また特殊な焼土については大川清氏（大川 1954）の指摘がある。結果的には両者ともに住居の火災を指しているようであるが、B区S I-4はこれらとは明らかに異なり、火災と認めるにはあまりにも否定的因素が多い。ましてS I-5の集積状態においては、これが人間の手以外で形成されたとするのは不可能であろう。住居使用時になされたとも考えにくく、仮に不慮の火災としても、必然的定住を余儀無くされる農耕集落では、住居が再構築される可能性は高いのではなかろうか。集落廃絶の要因は種々あろうが、両住居跡に見られる特殊な焼土は廃絶に伴う何らかの意識的産物として捉えられるものではなかろうか。

以上のようにB区の集落跡が古く、A区の集落跡と直接の因果関係が薄いとすれば、この地域における両集落は農耕社会の発展段階として、概ね以下のようにとらえられよう。

- ① まず、広大な沖積平野を見下ろし、小支谷の発達した洪積台地上に5軒を単位とする一集団が集落を設営する。集落には方形周溝墓が取り込まれ、一集落一基という形が示される。該期の他遺跡と同様な立地条件を備え、谷津を利用した小規模な生産集団と思われるが、この集落がその經營単位であったのか、また農業共同体の一構成単位であったのかは今後の検討課題である。いずれにせよ、方形周溝墓を有する集落という点で重要な位置を占めよう。本集落はその後、何らかの原因によって廃絶する。
- ② B区集落の廃絶後、同様の立地条件を示すA区に集落が営まれる。先述のように出土土器からはやや不明確であるが、B区の集落とはわずかでも時間を置いているようである。集落は環濠によって墓域と明分化しており、複数の集団によって形成された大規模な集落であったことが推定される。周辺地域における農業經營（共同体）の中心（拠点）的存在であったと

思われ、B区集落よりも発達した生産社会の姿が窺える。

大宮台地においても、南部を中心に宮ノ台式期の集落遺跡が急激に増加する。これは農耕文化が人々を介して流入したであろうとの情況証拠とはなりえようが、この地域における農耕社会の定着・発展は人間の移動という単純な図式ではかたづけられない。両集落がまったく別の集団による複次の移動によって成立したものなのか、あくまで周辺地域における発展段階の内に包括されたものなのかという点については、周辺の該期集落跡の分布や内容、あるいは他地域の系譜を引く多くの出土土器をそれぞれ詳細に検討せねばならない。

(飼持和夫)

引用・参考文献

- 青木義脩・高山清司・小倉均 1983 「北宿・馬場北・馬場東・馬場・小室山遺跡発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会報告書 第24集
- 青木義脩・小倉均 1983 「西谷・和田南・大北・大間木内谷遺跡発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会報告書 第25集
- 石井寛他 1980 「折本西原遺跡」 横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 大川清 1954 「安房田子台遺跡」
- 大塚初重 1959 「利島ヶヶケイ山遺跡の調査」 伊豆諸島文化財調査報告2
- 柿沼幹夫 1981 「戸塚上台遺跡発掘調査報告書」 川口市総務部市史編さん室
- 肥沼正和 1976 「朝霞市宮戸ハケタ遺跡の調査」 第9回遺跡発掘調査報告会発表要旨
- 埼玉考古学会 1976 「埼玉県土器集成4」
- 埼玉県 1982 「新編埼玉県史 資料編2」
- 坂本彰・小宮恒雄他 1975 「歳勝土遺跡」 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告V
- 坂本和俊・岡本幸男 1980 「神明ケ谷戸遺跡の調査」 第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨
- 塙博他 1972 「加倉・馬込・西原・平林寺」 東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書II
- 埼玉県遺跡調査会報告 第14集
- 重住豊・蒼田実 1978 「方南跡遺跡」 文化財シリーズ21 杉並区教育委員会
- 清水潤三他 1981 「伊皿子貝塚遺跡」 伊皿子貝塚遺跡調査團
- 庄野靖寿・星間孝次・市川修 1974 「岩槻市木曾良遺跡の発掘一貝塚と環溝の調査一」 第7回遺跡発掘調査報告会発表要旨
- 白石浩之・岡本孝之他 1980 「新羽大竹遺跡」 神奈川県埋蔵文化財調査報告17 神奈川県教育委員会
- 鈴木敏弘他 1978 「日詰遺跡発掘調査報告」 日詰遺跡発掘調査団 南伊豆町教育委員会
- 鈴木敏弘他 1981 「新倉牛王山遺跡」 和光市牛王山遺跡調査会
- 中島宏 1982 「熊谷市池上遺跡発掘調査概報」 資料館報No.13 埼玉県立さきたま資料館
- 中村恵次・斎木勝他 1974 「市原市菊間遺跡」 房總考古資料刊行会
- 野本孝明 1981 「山王遺跡」 山王遺跡調査会
- 宮内正勝・秦野昌明・仲野紀己子 1980 「中里前原遺跡第一回発掘調査報告書一」 中里前原遺跡調査会
- 宮本長次郎 1979 「住生活」『Ⅲ原始・古代人の生活』 日本考古学を学ぶ(3) 有斐閣
- 三森俊彦・阪田正一他 1974 「市原市大既遺跡」 房總考古資料刊行会
- 柳田敏司 1963 「円正寺遺跡発掘概報」 浦和市文化財の調査 第9集
- 横川好富・増田逸朗他 1971 「御訪山貝塚・御訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡発掘調査報告」 埼玉県遺跡調査会報告 第8集

XI 附編

1. 明花向遺跡A区試料(M-6-11 グリッド) 花粉及び鉱物分析報告

I 花粉分析

1. 試料

分析に供した試料は57点（下位よりNo.1～No.83とし、1点5cm高で連続採取）である。それら試料の花粉・胞子化石産出傾向については、No.1～73（No.7～9付近が東京輕石層、No.62～68が第Ⅰ黑色帶に相当）がごく少なく、No.73～81が少なく、No.82・83が普通となっている。

2. 分析方法

試料秤量20g～100g → HCl処理 → HF処理 → 重液分離 → アセトリシス処理 → KOH処理 → 封入

3. 分析結果及び考察

今回の分析で検出された花粉・胞子化石は下記の如くである。

<AP-1 (針葉樹花粉)>

Abies (モミ属), Picea (トウヒ属), Pinus (マツ属), Cryptomeria (スギ属), Tsugasieboldii (ツガ), T.C.T (Taxaceae・イチイ科, Cupressaceae・ヒノキ科, Taxodiaceae・スギ科の中の何れか)

<AP-2 (広葉樹花粉)>

Juglans (クルミ属), Alnus (ハンノキ属), Carpinus (クマシデ属), Corylus (ハシバミ属), Castanea (クリ属), Lepidobalanus (コナラ亞属), Aphananthe (ムクノキ属), Celtis (エノキ属), Zelkova (ケヤキ属), Acer (カエデ属), Aesculus (トチノキ属), Rhammaceae (クロウメモドキ科), Tilia (シナノキ属), Araliaceae (ウコギ科), Fraxinus (トネリコ属), Camellia (ツバキ属), Oleaceae (モクセイ科), Edgeworthia (ミツマタ属), Leguminosae (マメ科), Wisteria-type (フジ属 type), Moraceae (クワ科), Vitis (ブドウ属), Symplocos (ハイノキ属), Cyclobalanopsis (アカガシ亞属)

<NAP (草本花粉)>

Persicarea (サナエタデ節), Caryophyllaceae (ナデシコ科), Chenopodiaceae (アカザ科),

Thalictrum (カラマツソウ属), Cruciferae (アブラナ科), Patrinia (オミナエシ属), Cardusideae (キク亜科), Artemisia (ヨモギ属), Cichorioideae (タンポポ亜科), Gramineae (イネ科), Labiateae (シソ科), Fagopyrum (ゾバ属), Rubiaceae (アカネ科), Sessamum (ゴマ属), Plantage (オオバコ属), Calystegia (ヒルガオ属), Portulaca (スペリヒュ属), Ranunculaceae (キンポウゲ科), Forsythia (レンギョ属), Cyperaceae (カヤツリグサ科), Macleya (タケニグサ属), Geranium (フクロソウ属), Cuscuta (ネナシカズラ属), Euphorbiaceae (トウダイグサ科), Euphorbia (トウダイグサ属)

<FP (形態分類花粉)>

Tricolporate pollen (三溝型花粉), Tricolporate pollen (三溝孔型花粉)

<FS (羊齒類胞子)>

Polypodiaceae (ウラボシ科), Ophioglossum (ハナヤスリ属), Monolete spore (单条溝型胞子), Trilete spore (三条溝型胞子)

<その他の微化石>

Pseudoschizaed

次に検出された主な花粉・胞子化石の消長について述べる。

マツ属花粉

No.1~9まで7%以下で不連続に検出された。なおNo.1及びNo.9~59は検出個体数である。No.80になると24%に急増し、No.83の3.2%まで次第に減少する。

ハンノキ属花粉

No.1~59までは殆ど検出されず、No.60~79まではNo.78において12.5%と多産するものの、その他は6%以下で不連続に検出される。No.80~83では8.8%以上産出し、No.82において41.5%と非常に多い。

ハシバミ属花粉

No.1~59までは殆ど検出されず、No.60~78までにおいて16%以下で不連続に検出される。

フジ属花粉

No.73~83において連続して検出され、No.72以深においてはNo.67に検出されるだけであり、その他には無い。No.73~83のうちNo.75~78は40%以上の多産を示す。

キク亜科花粉

No.56~83において、ほぼ連続して検出され、No.55以深では殆ど検出されない。No.56~83の中で、No.69, 71, 73, 83が20%以上の多産をする。

ヨモギ属花粉

キク亜科と同じような花粉の産出を示すが、量的にはキク亜科よりも多い。特にNo.60~74では一

部を除けば30%以上の多産を示す。

タンボボ亜科花粉

No67~81まで連続して検出され、その中でNo67~76までは10%前後で安定している。

イネ科花粉

No57~83においてほぼ連続して検出される。その中でNo60以後は一部少ないとこもあるが、10%以上の産出がみられ多い。

単条溝型胞子

No7において90%、No64において20%と多産するが、その他は10%以下で散見される程度である。

次に古植生・古環境について考察する。

分析結果を総合すると、大きく4つの花粉帯にまとめることができる。

M-6-11-A 花粉帯 No1~59

全体的に花粉・胞子化石が非常に少ない。No7において単条溝型胞子が、No57においてタンボボ亜科、ヨモギ属が多い。その他に全体的にはスギ属、マツ属、等がみられる。

従って古植生・古環境の推定は困難である。あえて述べるならば全体的に裸地的環境と考えられ、後背地にマツ属、スギ属等が生育していたものと考えられる。そしてNo56~58になるとキク亜科、ヨモギ属等が生育するようになる。

M-6-11-B 花粉帯 No60~74

ヨモギ属を優占とし、キク亜科、タンボボ亜科、イネ科等の草本花粉が多く、樹木花粉はハシバミ属、スギ属等がみられる。

従ってヨモギ属、キク亜科、タンボボ亜科、イネ科等から成る草地的な環境が推定され、ハシバミ属、コナラ亜属、スギ属、ハンノキ属等が生育していたものと考えられる。しかしながらこの花粉帯は花粉・胞子化石の検出数が少ないので比較的裸地的環境であったかもしれない。

M-6-11-C 花粉帯 No75~78

マメ科のフジ属型が非常に多く、ヨモギ属、キク亜科、タンボボ亜科、イネ科、等を伴う。その他にコナラ亜属、ハンノキ属、スギ属、マツ属等が低率でみられる。

従って古植生は、マメ科が良く生育し、キク亜科、ヨモギ属、タンボボ亜科、イネ科等も良く生育していたと思われる。またコナラ亜属、スギ属、マツ属等も少ないながら生育していたものと言えよう。

M-6-11-D 花粉帯 No79~83

ハンノキ属、マツ属、キク亜科、ヨモギ属、イネ科等が多産する。

古植生はハンノキ属とマツ属を主体とする林または疎林が存在し、空地にヨモギ属、キク亜科、イネ科等が生育していたものと言えよう。

以上の結果からこれをまとめてみると次のことが言えよう。

明花向遺跡M-6-11グリッド試料の花粉分析は、その花粉構成からM-6-11-A, B, C, Dの4つの花粉帯に分带することが出来た。その特徴および古植生については上記に述べてきたが、M-6-11-A, B, Cの3花粉帯は花粉・胞子化石の産出傾向が少なかったので（特に同上A）古植生を推定するには必ずしも十分な化石数を検出することが出来なかつた。このように花粉・胞子化石が少なかった理由としては、堆積する際に花粉・胞子の混入が少なかつたか、あるいは花粉・胞子が堆積物の中で物理・化学的な分解を受けた等のことが考えられる。

また栽培植物についても以下の考察が出来る。すなわち本遺跡の花粉分析で栽培植物からのものとみられる花粉がしばしば検出されることである。M-6-11グリッドでは、No78, 80にゴマ属、No77, 82, 83にソバ属が検出されている。これらの試料の堆積当時にゴマ、ソバ等の栽培が付近で行われた可能性が考えられる。特にゴマの場合は形態的に現生ゴマの花粉とよく一致し、ゴマ栽培の可能性が強い。

II 鉱物分析

1. 試 料

明花向遺跡A区の鉱物分析試料は花粉分析用と同一資料を $\frac{1}{2}$ したものである。

2. 分析方法

原試料約50gを秤量→超音波装置を用い傾斜法にて粘土分を除去 $\rightarrow \frac{1}{4} \sim \frac{1}{8}\text{mm}$ 粒子を篩別 \rightarrow 重液分離（テトラブロモエタン） \rightarrow 鉱物300個以上同定

3. 分析結果

分析試料の色調において、大半の試料が褐色を呈する中で上部のNo62~68が暗褐色を示し、野外観察における黒色帯と一致する。又、No69~83では暗褐色~褐色を示している。

乾燥試料中の $\frac{1}{4} \sim \frac{1}{8}\text{mm}$ の砂分量は2.0~3.0%前後の試料が一般的である。しかし全体的に見て、No.7~9 (4.0~8.2%), No.43~45 (3.7~4.2%) 及び No.70~79 (3.8~6.9%) の付近では $\frac{1}{4} \sim \frac{1}{8}\text{mm}$ の砂分量が他の試料よりも多い。

$\frac{1}{4} \sim \frac{1}{8}\text{mm}$ の砂分中に含まれる重鉱物量は、No.1 (26.1%) から漸増し、No.5~37 (46.2~64.8%) で安定する。No.44 (31.0%) において極小が存在するが、滑らかに漸増してNo.65 (77.9%) で極大となる。その後、若干の凹凸を繰り返しながら推移してゆき、No.71 (55.7%) 付近に極小が、No.80 (80.6%) 付近に極大が認められる。

次に各鉱物の産出変化について述べる。

カンラン石

No.2 (71%)で最高値をとった後、急激に減少してNo.8 (4%)で最低となる。No.14 (38%)で極大がNo.17 (17%)で極小が見られる。No.21~66の間では比較的安定した産出が見られ、No.21~45では40%台、No.47~66では50%台の値を示す。No.67から減少に転じ、No.73 (12%)で極小となる。その後、緩やかに増加してゆき、No.83では39%を示す。

カンラン石の形態は自形から他形まで多様であるが、全体に半自形～他形のものが多い。

カンラン石の表面は風化作用によって褐色になっているものが多い。最下部のNo.1~4では、赤色に風化したカンラン石が大部分を占め、No.5~6及びNo.24~28にも赤色のカンラン石が含まれる。

斜方輝石

No.1~3ではやや少ないが、No.5から上の試料では安定した産出が見られる。No.5~43においては、No.17 (46%)で小さなピークが存在するものの、30%前後の値で安定している。No.45~65では20%台の値が多くなる。No.66から増加に転じNo.71~80で50%台の高率で安定し、No.80 (58%)で最大となる。No.81~83ではやや減少し、40%台の値を示している。

斜方輝石の形態は、下部のNo.7~10、上部のNo.61~63及びNo.68~79付近で自形～半自形の結晶が多い傾向があり、また一部の結晶には火山ガラスが周囲に付着しているものも見られる。これら以外の試料においては半自形～他形結晶が多い。

単斜輝石

全体的に10%未満の試料が多い。No.9 (30%)を最大とする下部のNo.5~19付近と、上部のNo.70以上の部分で比較的多く見られる。

単斜輝石が多産する試料では自形～半自形の結晶が含まれるが、全体としては半自形～他形のものが多い。

角閃石、緑レン石、ザクロ石

角閃石は最大でも4%と低率で断続的に検出された。結晶は半自形～他形で緑色～褐色を呈する。

緑レン石は1%以下と僅かで下半部に於いて、まばらに検出される。

ザクロ石はNo.45、46において微量検出されたに過ぎない。

不透明鉱物

最下部のNo.1~14付近で20%前後の値を示す。No.8 (29%)を最大として上方に減少し、No.32~66では、10%未満の試料が大部分を占める。No.67~83では10%以上の値で安定している。

火山ガラス

軽鉱物中に於ける火山ガラスの密集はNo.69~73付近に顕著に認められ、またNo.83にも若干みられる。

No.69~73付近における火山ガラスはバブル型をしているのに対し、No.83の火山ガラスは壁の厚い塊状のものと、そのほかの中間型・軽石型のものが混合している。

4. 考察

No.7~9付近は、カンラン石が極小となり、自形を示す斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物が多産

すること等、東京軽石層(TP)の鉱物的特徴をよく表わしている。

最下部のは、No.1～3斜方輝石・單斜輝石の産出が低率で他形結晶が多く、カンラン石も赤色に風化した粒子が多くいた。試料も粘性が強く、粘土化していること等から、風化作用の強い影響下にあったものと推定される。また、No.25～29付近においても風化した鉱物が見られることから、この部分は風化作用がやや強かったものと考えられる。

No.69～73付近の火山ガラスの密集は前回の報告でも認められたように、「姶良Tn火山灰(AT)」(町田、新井 1976)に対比される。

No.83において、ATとは形態の異なる火山ガラスの多産が認められた。これは火山ガラスの形態及び層位から、立川断層地域のUG(山崎 1978)或いは房総半島南部の「安房ガラス質火山灰層(AG)」(杉原、吉村、細野、森脇 1978)に類似性があると考えられる。対比については、より詳細な今後の研究を待ちたい。

参考文献

- 野田洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰—姶良Tn火山灰の発見とその意義— 科学 Vol. 46, No. 6, P. 339～347
山崎晴雄(1978)立川断層とその第四紀後期の運動 第四紀研究 Vol. 16, P. 237～246
杉原重雄・吉村光敏・細野衛・森脇広(1978)房総半島南部の後期更新世テフラ層と海岸段丘について 第四紀研究 Vol. 16, P. 255～262

2. 本遺跡群出土土器に関するX線回折分析・電子顕微鏡観察

1. 実験

1.1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示すとおりである。X線回折試験に供する遺物試料は洗浄、乾燥した後に、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、φ10mmの試料台にヒルバーベーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1.2 X線回折分析

土器胎土に含まれる粘土鉱物および造岩鉱物の同定はX線回折分析法によった。

測定には理学電機製X線回折装置を用い、X線管球；銅対陰極、フィルター；ニッケル、印加電圧-電流；30KV-15mA、スリット系； $1^{\circ}-0.5\text{mm}-1^{\circ}$ の条件でおこなった。

走時速度は $2^{\circ}/\text{min}$ 、フルスケールは800カウントとした。なお、胎土の分析に先だって原土と思われるローム質粘土の分析をおこなった。X線回折試験は原土、電気炉において 700°C 、 900°C で各々1時間焼成した試料（同一試料を石英ガラスに定着し、原土、 700°C 、 900°C と順次実験をおこなう）の3段階で実施した。その結果、組成上に大きな変化のないことを確かめた上で胎土分析をおこなった。ただ 900°C 以上になった場合の組成については明らかではなく、今後の検討が必要である。

1.3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物およびガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によっておこなった。

観察には日本電子製T-20を用い、倍率は $\times 45$ 、 300 、 700 、 1500 、 4500 の5段階でおこない、写真撮影をした。

45~300倍は胎土の組織、700~4500倍は粘土鉱物およびガラスの生成状態を観察した。

2. 実験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示すとおりである。

第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の組成が示してあり、左側は各胎土に対する分類をおこなった結果を示している。X線回折試験結果に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中にあらわれる各鉱物特有のピークの高さ（強度）をmm単位で測定したものである。

ガラス量は大略 $2\theta=10^{\circ} \sim 20^{\circ}$ の範囲にあってチャート全体に膨れあがるブロードな現象を示す部分に対する面積で表示し、ガラス量の比較の材料とした。

電子顕微鏡観察によって得られたガラス量とX線回折試験におけるガラス量を比較対比し、さら

第1表 脱土性状表

試料No.	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘土鉱物 よび造岩鉱物 (mm)								備考				
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch Mi-Hb	Mo	Mi	Hb	Ch	Ka (Ha)	Au	Hy	Qt	Pl	Cr (Mu)	Mg		
Myo-1	H	N	⑩	⑩	3	2					137	22				粗粒Qt, Pl, 粒径のそろったローム質粘土。微小ガラス	
2	I	N	⑪	⑩	3						120	21				"	
3	H	N	⑩	⑦	2	2				4	138	19				粗粒Qt, Pl, ローム質粘土。微小ガラス	
4	J	III~N	⑫	⑫	4		2				187	20	3			中~粗粒Qt, Pl, ローム質粘土。細粒ガラス	
5	D	N	⑧	⑨	3	3	7			4	153	48	13			粗粒Qt, Pl, 砂質ローム or 砂質粘土。微小ガラス	
6	H	N	⑩	⑩	3	2					102	21				中粒Qt, Pl, ローム質粘土。	
7	F	N	⑤	⑩				3		4	2	127	29			細粒Qt, Pl, 粒径のそろったローム質粘土。	
8	I	III~N	⑪	⑩	3					3		141	23			粗粒Qt, Pl, ローム質粘土。細粒ガラス	
9	B	N	①	⑩	3	3	4					74	14	7		細粒Qt, Pl, 淘汰のよいローム質粘土。微小ガラス	
10	M	N	⑩	⑩				4				76	41			粗粒Qt, Pl, ローム質粘土。	
11	B	N	①	⑩	3	3	3				147	20	3			中粒Qt, Pl,	
12	G	N	⑦	⑩		3	2				120	20				粗粒Qt, Pl, 砂質ローム。	
13	L	III~N	⑬	⑬	2		4				170	18				" ローム質粘土。細粒ガラス	
14	K	N	⑯	⑫	2			11	3			127	20	36			砂質ローム。微小ガラス
15	J	N	⑫	⑩	4		3					2	90	10			" ローム質粘土。
16	I	N	⑩	⑩	4					2		93	18				" "
17	A	N	①	①-2	4	2	5	3		4		90	16	17			粗粒Qt, Pl, 均質な砂屑性粘土。
18	J	N	⑫	⑩	3		2			4	5	131	21				" ローム質粘土, 軽石混入
19	J	N	⑫	⑩	4		3					67	13				" 砂屑性粘土(植物センイ)
20	M	N	⑩	⑩						2	112	20				" ローム質粘土	
21	K	N	⑩	⑩	2		4	2				150	18				中粒Qt, Pl, ローム質粘土(植物センイ)
22	I	N	⑩	⑩	2							113	17				粗粒Qt, Pl, ローム質粘土
23	H	N	⑩	⑩	3	3				2	121	25				" " (花粉)	
24	H	N	⑩	⑩	3	2					102	16				" " (")	
25	H	N	⑩	⑩	3	2				2	102	32				中粒Qt, Pl, ローム質粘土	
26	I	N	⑩	⑩	2						3	71	15				" 均質な砂屑性粘土
27	J	III~N	⑩	⑩	3		2			2	71	20				粗粒Qt, Pl, ローム質粘土(植物センイ) 細粒ガラス	

-28	J	N	⑫	⑯	2	2	4	3	80	12		粗粒Qt, Pl, ローム質粘土(植物センイ) 微小ガラス
29	J	III~IV	⑬	⑭	4	4		2	73	22		" 均質な砂屑性粘土。細粒ガラス
30	H	N	⑩	⑯	4	3			132	42		" 砂屑性粘土。微小ガラス
31	B	N	①	⑯	3	2	2	2	76	27		" 砂質ローム。"
32	C	N	①	⑯	4	4	2	(4)	3	65	21	中粒Qt, Pl, 砂屑性ローム質粘土(植物センイ)微小ガラス
33	J	N	⑫	⑯	3	2	2	4	2	93	15	" 均質な砂屑性粘土。"
34	C	N	①	⑯	4	3	2			98	11	粗粒Qt, Pl, 砂屑性ローム質粘土(植物センイ) "
35	E	N	⑤	⑯			2	3		94	16	" ローム質粘土(植物センイ) "
36	E	N	⑤	⑯			2	3		89	18	" " (花粉)(軽石) "
37	F	N	⑥	⑯			2	4		70	8	細粒Qt, Pl, 均質な砂屑性粘土(植物センイ)
38	E	N	⑥	⑯			2	3	2	46	11	粗粒Qt, Pl, ローム質粘土 "
39	H	N	⑩	⑯	3	3			3	88	20	23 " 砂質ローム "
40	J	N	⑫	⑯	3	2		5		116	22	細粒Qt, Pl, ローム質粘土 "
41	J	III~IV	⑫	⑯	3	2				100	13	粗粒Qt, Pl, " (軽石) 細粒ガラス
原土-1	I		⑪	⑯	3			6	26	16		
2	H		⑩	⑯	4	4			18	10		
3	H		⑩	⑯	3	3			22	5		
4	I		⑪	⑯	3			7	22	5		
5			⑫	⑯	4		2	2	6	38	8	
6	H		⑪	⑯	2			(8)		30	5	

焼成ランク

Mu... I glass... N

Mu-Cr... II 原土... V

Cr-glass... III

Mo... モンモリロナイト

Mi... 霧母輝

Hb... 角閃石

Ch... 緑泥岩

Ka... カオリナイト

Ha... ハロイサイト

Au... 普通輝石

Hy... 紫蘇輝石

Qt... 石英

Pl... 削長石

Cr... クリストバライト

Mu... ムライト

Mg... マグネタイト

組成分類

Mo-Mi-Hb

Mo-Ch

Cr... クリストバライト

三角ダイアグラム

Mi-Hb

菱型ダイアグラム

にムライト (Mu), クリストバーライト (Cr) などの組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2.1 組成分類

i) Mo—Mi—Hb 三角ダイヤグラム

第 i 図に示すように三角ダイヤグラムを①～⑬に分割し、位置分類を各胎土についておこない、各胎土の位置を数字であらわした。

Mo, Mi, Hb の 3 成分の含まれない胎土は記載不能として⑭に含め、別に検討した。

三角ダイヤグラムはモンモリロナイト (Mo), 雲母類 (Mi), 角閃石 (Hb) の X 線回折試験におけるチャートのピーク高を百分率 (%) で表示する。

モンモリロナイト (Mo) は $Mo/Mo+Mi+Hb \times 100$ で百分率として求め、同様に Mi, Hb も計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の①～④は Mo, Mi, Hb の 3 成分を含み、各辺は 2 成分、各頂点は 1 成分よりなっていることをあらわしている。

位置分類についての基本原則は第 i 図に示すとおりである。

ii) Mo—ch, Mi—Hb 菱型ダイヤグラム

第 215 図に示すように菱型ダイヤグラムを①～⑬に分割し、位置分類を数字であらわした。記載不能は⑭として別に検討した。

記載不能はモンモリロナイト (Mo), 雲母類 (Mi), 緑泥石 (ch), 角閃石 (Hb) のうち、⑧ 3 成分以上含まれない、⑮ Mo, ch 2 成分が含まれない、⑯ Mi, Hb の 2 成分が含まれないの 3 例がある。

菱型ダイヤグラムは Mo—ch, Mi—Hb の組合せを表示するものである。

Mo—ch, Mi—Hb の各次の X 線回折試験のチャートの高さを各々の組合せ毎に百分率であらわすもので、例えば、 $Mo/Mo+ch \times 100$ と計算し、各組合せ百分率を記載したものである。

菱型ダイヤグラム内にある①～⑦は Mo, Mi, ch, Hb の 4 成分が含まれ、各辺は Mo, Mi, ch, Hb のうち 3 成分、各頂点は 2 成分が含まれていることを示す。⑪—⑫ と ⑬—⑭ は現在のところ大きな意味はないが胎土分析の量が増えてくると位置分類上の区分が必要となるかもしれないが現在は⑪として一括に取り扱った。

位置分類についての基本原則は第 i 図に示すとおりである。

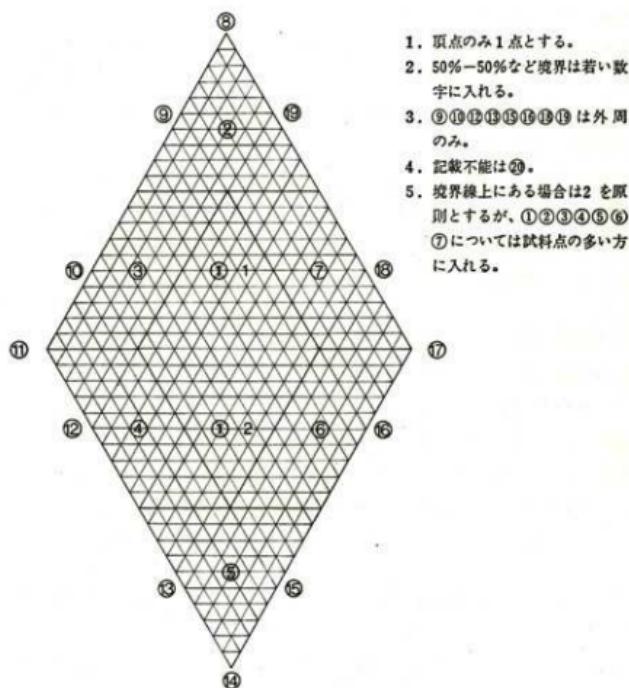
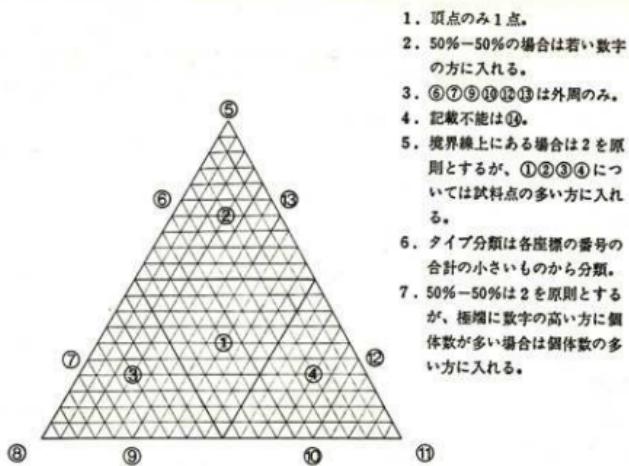
2.2 焼成ランク

焼成ランクの区分は X 線回折試験による鉱物組成と電子顕微鏡観察によるガラス量によっておこなった。

ムライト (Mu) は磁器など高温で焼かれた状態ではじめて生成する鉱物であり、クリストバーライト (Cr) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき X 線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から土器胎土の焼成ランクを I ～ V の 5 段階に区分した。

① 焼成ランク I ……高温を示すムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広い。



第Ⅰ図 三角・菱形ダイヤグラム位置分類図

- ① 焼成ランク I ……ムライトとクリストバーライトが共存し単位ガラスの面積が狭くなる。
- ② 焼成ランク II ……ガラスの中のクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が小さく、葉状断面をなし、ガラスのつながりにかける。
- ③ 焼成ランク III ……ガラスのみが生成し、原土の組織をかなり明瞭に残す。ガラスは微小な葉状を呈する。
- ④ 焼成ランク IV ……原土に近い組織を有し、ガラスがほとんどできていない。

以上の I ~ V の分類は原則であるが胎土の材質すなわち粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せと、いくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第 I 表の右端の備考に理由を記した。

2.3 タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイヤグラム、菱型ダイヤグラムの位置分類による組合せによっておこなった。

同じ組成をもつ土器胎土は位置分類の数字組合せも同じはずである。

タイプ分類は三角ダイヤグラムの位置分類における数字の小さいものの組合せから作られるもので、便宜上アルファベットの大文字を使用し、同じ組合せのものは同じ文字を使用し、表現した。例えば三角ダイヤグラムの①、菱型ダイヤグラムの①—①の組合せは A、三角ダイヤグラムの②、菱型ダイヤグラムの⑤は B という具合である。各文字の後の()内の数字は三角、菱型ダイヤグラムの位置分類の数字を合計したものである。

近い組成を示しながら位置分類上隣接するタイプ分類に入る場合には試料数の多いものの類似として A' などとダッシュを付けて分類した。

なお、タイプの分類の A, B, C 等は便宜上であり、今後試験数の増加とともに統一した分類名称を与える考えである。

3. 実験結果

3.1 タイプ分類

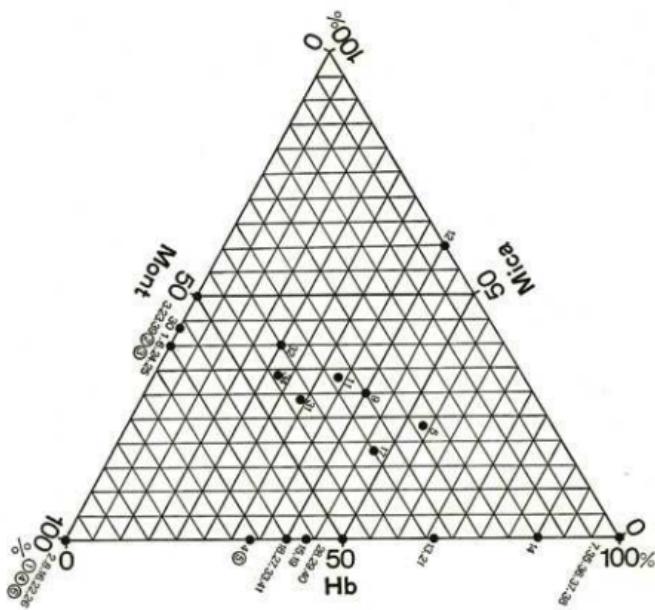
土器胎土は第 I 表胎土性状表に示すように、第 II 図三角ダイヤグラム、第 III 図菱型ダイヤグラムの位置分類、焼成ランクに基づいて A~M の 13 タイプに分類される。

明花向遺跡発掘現場周辺で採取した原土は第 II 図、第 III 図に示すように ⑪—⑫、⑬—⑭ の位置分類に該当し、前者は H タイプ、後者は I タイプの土器胎土に対比される。

土器胎土は、E, H, I, J の 4 タイプが個体数としては最も多く、在地、あるいは近隣の地域のものではないかと推察される。

第 III 図石英 (Qt) - 斜長石 (pl) 相関図では I と II の 2 つのグループに個体数が集中するのが特徴である。

全体の特徴としては粗粒の石英、斜長石を混入するローム質粘土で土器は製作されており、ガラスは微小で、焼成ランクは IV と低いことである。

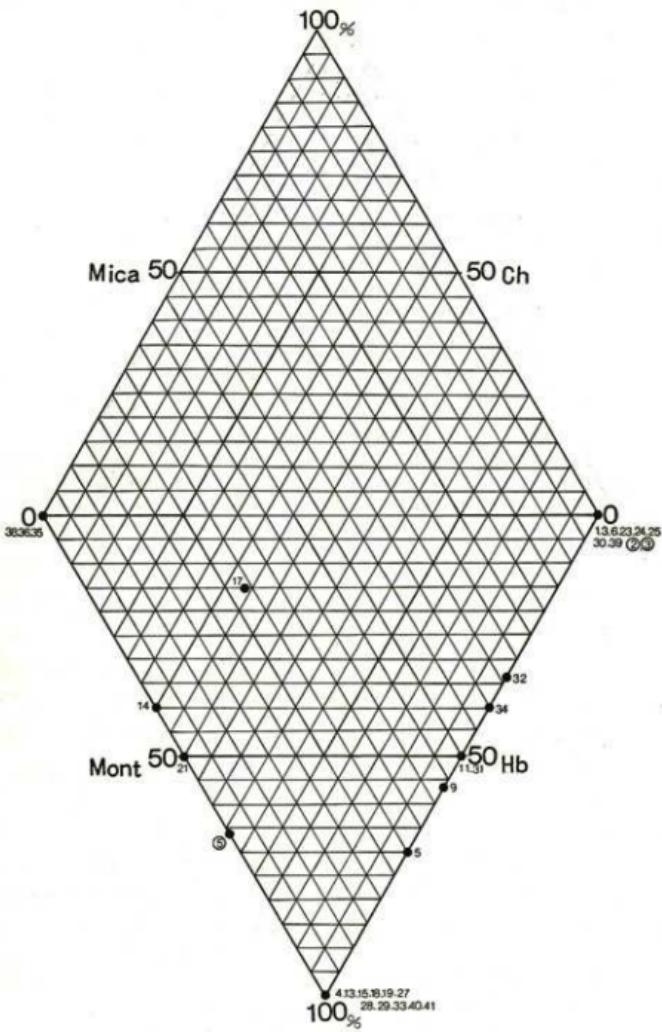


第ii図 Mo-Mi-Hb 三角ダイヤグラム

第 ii 表 胎土分析土器対応表

試料No.	遺跡	遺構	挿図	No.	器種	部位	備考
Myo-1	明花向遺跡 A 区	第 1 号住居跡	第 49 図	1	壺	胴(中位)	
2	"	"	第 50 図	10	壺	" (")	
3	"	"	第 49 図	2	壺	" (")	流水文
4	"	第 1 号方形周溝墓	第 54 図	1	"	" (上位)	
5	明花向遺跡 B 区	第 2 号住居跡	第 111 図	2	"	頸	波状文・格子状文
6	"	"	第 4 図	1	"	"	擾流水文
7	"	"	第 112 図	9	壺	胴(上位)	"
8	"	第 10 号住居跡	第 144 図	1	壺	" (中位)	
9	"	"	第 145 図	10	台付壺	" (下位)	
10	"	第 7 号住居跡	第 135 図	1	壺	" (")	重圓文
11	"	第 6 号住居跡	第 131 図	1	壺	" (上位)	簾状文・波状文
12	"	第 3 号住居跡	第 119 図	2	"	" (中位)	
13	"	第 5 号住居跡	第 126 図	1	壺	" (上位)	二次焼成 「ヨ」字重ね文
14	"	第 4 号住居跡	第 121 図	20	壺	口縁	

資料No.	遺跡	群	資料No.	遺跡	群	資料No.	遺跡	群
Myo-15	明花向遺跡 A 区	V	Myo-24	明花向遺跡 A 区	III	Myo-33	明花向遺跡 C 区	V
16	"	"	25	"	IV	34	明花上ノ台遺跡	"
17	"	"	26	明花向遺跡 C 区	V	35	"	"
18	"	"	27	"	"	36	"	"
19	明花向遺跡 B 区	"	28	"	"	37	"	V
20	"	"	29	"	"	38	"	V
21	"	"	30	"	"	39	明花向遺跡 B 区	I
22	"	"	31	"	V	40	"	"
23	"	"	32	"	"	41	"	"



第図 Mo—Ch, Mi—Hb, 菱形ダイヤグラム

土器胎土中に植物繊維を混入するものが7個あり、他のものとは異なるものが存在していることは明らかである。

Aタイプ……Myo—17

モンモリロナイト (Mo), 雲母類 (Mi), 角閃石 (Hb), 緑泥石 (ch) の4成分を含む。均質な碎屑性粘土で作られており、焼成ランクはⅣと低い。

Bタイプ……Myo—9, 11, 31

Cタイプ……Myo—32, 34

Dタイプ……Myo—5

B, C, Dタイプの土器胎土はモンモリロナイト (Mo), 雲母類 (Mi), 角閃石 (Hb) の3成分を含み、緑泥石 (ch) に欠ける。これらの土器胎土は位置分類において若干異なるが成分的には非常に類似しており、同タイプの胎土と推察される。主にローム質粘土を使用し、焼成ランクはⅣと低い。

Eタイプ……Myo—35, 36, 38

角閃石 (Hb), 緑泥石 (ch) の2成分を含み、モンモリロナイト (Mo), 雲母類 (Mi) に欠ける。主に粗粒の石英、斜長石を混入するローム質粘土で作られており、植物繊維を混入するのが特徴である。ガラスは微小で、焼成ランクはⅣと低い。

Fタイプ……Myo—7, 37

角閃石 (Hb) の1成分を含み、モンモリロナイト (Mo), 雲母類 (Mi), 緑泥石 (Hb) の3成分に欠ける。中～粗粒の石英、斜長石を含み、 $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$ を主体とする粘土で作られ、ガラスは微小で、焼成ランクはと低い。

Gタイプ……Myo—12

雲母類 (Mi), 角閃石 (Hb) の2成分を含み、モンモリロナイト (Mo), 緑泥石 (ch) に欠ける。粗粒の石英、斜長石を混入する砂質ロームで作られており、ガラスは微小で、焼成ランクはⅣと低い。

Hタイプ……Myo—1, 36, 23, 24, 25, 30, 39

モンモリロナイト (Mo), 雲母類 (Mi) の2成分を含み、角閃石 (Hb), 緑泥石 (ch) の2成分に欠ける。主に中～粗粒の石英、斜長石を混入するローム質粘土で作られ、ガラスは微小で、焼成ランクはⅣと低い。個体数としては8個あり、量的に多く、在地あるいは近隣地域で製作された可能性が強い。原土の組成も明花向—2, 3はHタイプの土器と同じものであり、この点から判断して在地性と考えられる。

Iタイプ……Myo—2, 8, 16, 22, 26

モンモリロナイト (Mo) の1成分を含み、雲母類 (Mi), 角閃石 (Hb), 緑泥石 (ch) の3成分に欠ける。中～粗粒の石英、斜長石を混入するローム質粘土で作られ、ガラスは微小で焼成ランクはⅣと低い。個体数は5個あり、原土明花向—1, 4, 6と同じ組成の土器であり、在地性と判断される。

Jタイプ……Myo—4, 15, 18, 19, 27, 28, 29, 33, 40, 41

モンモリロナイト (Mo), 角閃石 (Hb) の 2 成分を含み、雲母類 (Mi), 緑泥石 (ch) の 2 成分に欠ける。粗粒の石英, 斜長石を混入するローム質粘土で作られ、ガラスは微小で、焼成ランクは N と低い。Myo-27 は植物繊維を混入し、他のものと異質である。個体数は 10 個と最も多く、在地性と推察されるが、明花向遺跡で採取した原土には J タイプに対比されるものがなく、在地性とすることには疑問が残るが、採取した露頭断面にはローム層のみがあり、これらより下位あるいは沖積層中に同じタイプの土がある可能性もあり、在地あるいは近隣地域で製作された土器の可能性が高い。

K タイプ……Myo-14, 21

モンモリロナイト (Mo), 角閃石 (Hb), 緑泥石 (ch) の 3 成分を含み、雲母類 (Mi) に欠ける。中～粗粒の石英, 斜長石を混入するローム質粘土で作られ、ガラスは微小で、焼成ランクは N と低い。Myo-21 は植物繊維を含み、製作工程が異なる。

L タイプ……Myo-13

モンモリロナイト (Mo), 角閃石 (Hb) の 2 成分を含み、雲母類 (Mi), 緑泥石 (ch) の 2 成分に欠ける。粗粒の石英, 斜長石を混入するローム質粘土で作られ、ガラスは細粒で、焼成ランクは III～IV である。材質的には J タイプと類似する。

M タイプ……Myo-10, 20

Myo-10 は緑泥石 (ch) の 1 成分を含み、モンモリロナイト (Mo), 雲母類 (Mi), 角閃石 (Hb) の 3 成分に欠ける。Myo-20 はモンモリロナイト (Mo), 雲母類 (Mi), 角閃石 (Hb), 緑泥石 (ch) の 4 成分に欠ける。Myo-10, 20 ともに位置分類では記載不能の Q4-② であるが、成分的には異なる。Myo-10, 20 ともに粗粒の石英, 斜長石を混入するローム質粘土で作られており、ガラスは微小で焼成ランクは IV と低い。粘土は主に $n \text{Al}_2\text{O}_3, m\text{SiO}_2, l\text{H}_2\text{O}$ と火山ガラスで構成される。

3.2 石英 (Qt) 一斜長石 (pl) の相関について

第 iiiii 図 Qt-pl 相関図は X 線回折試験によって得られた石英 (Qt) と斜長石 (pl) の強度高を単純にグラフ化したものである。

実験は Full scale 800count に条件設定したものであり、この条件下におけるチャート上の強度高をミリメーター単位であらわしてある。

石英, 斜長石は砂の主成分であり、土器製作過程で粘土中に混入される。

砂における石英, 斜長石の量比は後背地の地質および運搬過程における流速などの条件によって変化し、ある地域においては大まかに一定の比率を有するものと推察される。

ある地域におけるある比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは各集団における技術上の問題である。例えば同一集団において使用する粘土は若干異っても砂の粘土に対する混合比は、ある一定の量比にあると考えられる。すなわち、各集団における土器焼成温度は燃料の相違、燃焼のさせ方など異っていたであろうし、燃料の原材料となる木材の相違、いいかえれば、植生によっても異ったであろう。

粘土に対する砂の混合比は各集団が維持した土器焼成温度と密接な相関をもつたであろうと推察される。すなわち、維持した土器焼成温度において良質の土器を焼きあげるために、粘土の材

質と砂の混合比を経験的に決定したものであり、砂の混合比は純然たる土器焼成上の問題であると推察される。

明花向遺跡における Qt—pl の相関は第iii図に示すとおりである。

土器は大きく I, II の 2 つのグループに分類される。

I グループ……Myo—6, 9, 15, 16, 17, 19, 24, 26, 27, 28, 29, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 39, 41

石英 (Qt) は 60~105 の範囲にあり、斜長石 (pl) は 5~30 の範囲にある。これらは個体数も多く、集中度も高いのが特徴である。I グループの中でも Qt が 60~80 に集中するものと、80~105 に集中するものがあり、更に 2 つのグループに区分することが可能であろう。

I グループ……Myo—1, 2, 3, 7, 8, 11, 12, 14, 18, 20, 21, 22, 23, 40

石英 (Qt) は 110~155、斜長石 (pl) は 15~30 の範囲にある。個体数は I グループに次いで多く、集中度も高い。

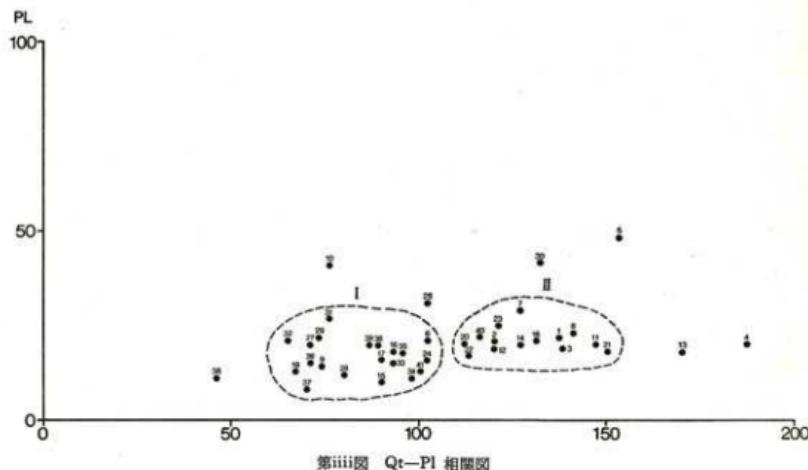
その他のグループ……Myo—4, 5, 10, 13, 30, 38

I, II の各グループに入らないこれらの土器は砂の混合比にバラツキが多く、前述のように技術上の違いを意味するならば、別の集団によって製作された可能性が高い。

砂の混合比より土器は I, II の 2 つの大きなグループとその他に区分できた。前記の前提条件に基づいて考察するならば I グループの土器はある時代における同一集団によって製作されたものであり、II グループも同様であろう。

I グループと II グループが同時代の別集団を意味するのか、同一集団の時間の相違を意味するのかは、別に土器の形態、出土層準による時代の決定との対比によらなくてはならない。

3.3 まとめ



第iii図 Qt—Pl 相関図

土器胎土はA～Mの13タイプに分類されるが、個体数の多いものとしてはJタイプ—10個、Hタイプ—8個、Iタイプ—5個、Eタイプ—3個の順である。

B、C、Dタイプは類似した組成を有しており、同一タイプのものと推察される。(6個)

明花向遺跡における原土と対比される土器胎土は、H、Iの2タイプである。この2タイプは在地性のものと判断してさしつかえなかろう。しかし、個体数の最も多いJタイプに対比される原土がなく、在地性であるかどうかの判断は難しい。個体数の多さからいえば在地性の可能性が最も高く、その場合は今回採取した原土と異なる層準の粘土を使用しているものと推察される。

また、土器の中に植物繊維を混入しているものが7個があり、これらも製作技術上異なるものである。砂の混合比によってⅠグループ(20個)、Ⅱグループ(14個)が区分されており、その他は7個と少ない。これらの区分が何を意味するものであるかは土器の形態、出土層準などとの対比にまたねばならないが、グルーピングができるということは何かを意味しており、3.2項でのべた純然たる技術上問題であるかどうかの検討は必要である。

(井上 嶽)

3. 明花向遺跡B区試料¹⁴C年代測定報告

パリノ・サーベイ株式会社

1. 試 料

今回の年代測定用資料は、当遺跡で検出された第4号・第5号住居跡から出土した炭化材片、6試料である。

2. 測 定

¹⁴C年代測定は、学習院大学理学部年代測定室が行った（学習院大学放射性炭素年代測定結果報告参照）。

3. 結 果

第4号住居跡・第5号住居跡は、弥生時代中期末（宮ノ台）とされていたが、今回の測定結果では、第4号住居跡のC-11試料が、BPY 2,810±100と最も新しい年代を示し、他は BPY 3,000を超えている。

弥生中期末は、BPYで考へた場合1,800～1,900 BPYが妥当なところと思われ、今回の測定年代とは1000～1700年の開きがある。

この理由は不明であるが、いくつか考えてみると

- ① 住居跡は弥生中期末であるが、住居跡内に出土した炭化材は、当時のものでなく、さらに古い材を使用していた（たとえば付近の低地より、埋れ木などをもってきて使用したなど）。
- ② 住居跡が廃棄された後、材を含む古い堆積層が住居跡に再堆積した。
- ③ 住居跡の時代、時期が繩文後～晩期に相当する。
- ④ 測定方法に問題があった。

などが考えられる。④は炭素の多い純粋な資料であり、測定値のバラツキも少ないので、考えにくい。

また、③・②も発掘調査において、そのような処見は得られていない。

①は、①～④までの中では、考えやすい要因として注意されるが、あくまで推定である。

学習院大学放射性炭素年　測定結果報告書

1983年12月22日

1983年6月10日に受領致しました試料についての¹⁴C年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は β 線計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差（one sigma）に相当する年代です。試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限とする年代値（B.P.）のみを表示しております。また資料の、 β 線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が 2σ 以下のときには、Modernと表示し、δ¹⁴C%を付記しております。

記

Code No.	試 料	B. P. 年代 (1950年よりの年数)
GaK-11191.	Charcoal from 浦和明花向遺跡 B, C-5, SI-6. (1)	3020±110 1070 B. C.
GaK-11192.	Charcoal from 浦和明花向遺跡 B, C-11, SI-6. (2)	2810±100 860 B. C.
GaK-11193.	Charcoal from 浦和明花向遺跡 B, C-8, SI-6. (3)	3090±110 1140 B. C.
GaK-11194.	Charred wood from 浦和明花向遺跡 B, C-81-1, SI-9. (1)	3250±100 1300 B. C.
GaK-11195.	Charcoal from 浦和明花向遺跡 B, C-60-2, SI-9. (2)	3210±90 1260 B. C.
GaK-11196.	Charcoal from 浦和明花向遺跡 B, C-52, SI-9. (3)	3520±110 1570 B. C.

以 上

木 越 邦 彦

※上記中の S I - 6 は第 4 号住居跡、S I - 9 は第 5 号住居跡に相当する。